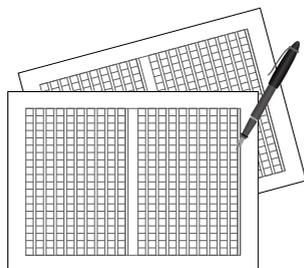


第4回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



第4回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



刊行にあたって

本県は平成22年、全国の都道府県で唯一、県民の読書活動の推進に関する条例を制定し、以来、県民ぐるみで読書活動を進めており、平成26年には、一層の県民意識の向上を図るため、11月1日を「県民読書の日」と定めるとともに、記念事業として「ふるさと秋田文学賞」を創設いたしました。

本文学賞は、秋田の自然や人物、文化、風土、物産などをテーマとした小説や随筆、紀行文を広く募集し、ふるさと秋田を描いた文学作品を誕生させ、多くの人に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとしております。

第4回を迎えた今年度は、全国から106編の御応募をいただき、うち4編が入賞いたしました。今回の特徴として、入賞作4編のうち3編までが家族を描いたものであったことが挙げられます。これは、家族の絆を改めて結び直し、激しい社会の変化に時に戸惑いながらも、自分を見失うことなく人生を前向きに歩もうとする人間の姿と、秋田の自然や風土が、しつくりマッチしたことが背景にあると思われ

ます。偶然に巡り会った一冊の本が、人生に寄り添う生涯の友となることもあります。県民一人ひとりが読書に親しみ、読書によって家族や仲間とコミュニケーションを深め、心豊かな人生を送ることができま

すようお願いしております。終わりに、「第4回ふるさと秋田文学賞」にたくさんの方の御応募をいただき、心から感謝申し上げます。

平成30年2月1日

秋田県企画振興部長

佐々木

司

目次

第4回ふるさと秋田文学賞 小説の部

● ふるさと秋田文学賞

ヘミングウェイに聞いてみて

夢野寧子・・・・・・・・7

受賞者のことば

● ふるさと秋田文学賞佳作

みずのたたき、てふてふの花

渡部麻実・・・・・・・・33

受賞者のことば

第4回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

●ふるさと秋田文学賞

譲り葉

受賞者のことば

青山 トーゴ・・・71

●ふるさと秋田文学賞佳作

「生きる」父の愛した映画

受賞者のことば

鹿住 敏子・・・93

第4回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

ヘミングウェイに聞いてみて

夢野寧子・作

ヘミングウェイに聞いてみて



電車はまた線路を下ってゆき、紫とピンク、二本のラインの入った銀色の車両は、すぐに彼方へと走り去った。

田沢湖線の神代駅じんだいで降りた乗客は私一人だった。無人駅故に、もっと小さく古めかしい駅を想像していたのだが、上下線それぞれにホームがあり、建て替えたばかりなのか駅舎も新しくなった。

駅を出ると、水田を横目に私は歩き始めた。穂をつける前の緑の稲の背後には、青々とした山なみが広がっている。視界に映る大部分は山と農地、それから澄んだ青空だが、ちらほらと家屋も点在していた。都心の住宅地のように狭苦しく並んでいる家は一軒もなく、これでは回覧板を回すのも大変だろうな、とどうでもよい感想を抱いた。

砂利道から舗装された道へ切り替わると、六月だというのに早くもコンクリートが熱を帯びている気がした。強い日差しを放つ太陽の下、出歩く人間は少ないのかすれ違うのは車ばかりで、ただその車とて時折道路を通り過ぎていくだけなので、エンジン音が遠ざかれば辺りはひどく静かだった。

秋田へ来たのは、ほんの気まぐれだった。部屋にこもっているのに飽きたから。人のいない場所に行きたかったから。綺麗な空気を吸いたかったから。あるいは、退屈しのぎに始めた本

棚の整理中、貰ったまま未読だったヘミングウェイの短編集を見つけたから。そのどれもがここへ来た理由だったが、本当のところはただ、どこかへ逃げ出したかっただけなのかもしれない。

目的地である抱返り^{だまがえ}溪谷へ向かう途中、荷物を預けるために一旦宿へ立ち寄ることにした。フロントで対応してくれたのは私と同じくらいの年の女性で、これから抱返り溪谷へ徒歩で向かうと話すと、「かなり歩きますよ」と目を丸くされた。

抱返り溪谷へ行くバスは、随分前に廃線になってしまったらしく「紅葉シーズンには、臨時でバスも出るんですけど」と気の毒がられたものの、初めから乗り物に頼るつもりはなかった。ので、特に不便に思うこともなかった。

宿を後にすると、私は再び歩き始めた。フロントの女性の話では、抱返り溪谷の入口までは歩くこと三十分以上かかるらしい。一年前の私なら面倒がってタクシーを呼びつけ、無駄な時間は省こうとしたことだろう。だが、忙しかったあの頃と違って、今は時間がたっぷりある。それにこの一週間、ずっと部屋に閉じこもっていたことを考えれば、少しは体を動かすべきだろう。

東京では出かける際はいつも音楽を聞いていたが、今日はイヤホンで耳をふさぐことはせず

に、代わりに風の音や稲と稲が触れ合う微かな囁き声に耳を澄ませた。

一人旅をするのは、去年の夏以来、人生で二度目の経験だった。あの時も同行者がいなくなつたせいか、様々なことを思い巡らせた。これまでのこと、これからのこと。それから、今の自分について。

一人見知らぬ土地を歩いていると、普段は考えないようにしている面倒事から、忘れたと思つていたとりとめもない過去の出来事まで、色々なことが頭に浮かんでは消えていく。

「僕の住んでいたところでは、正月は雑煮じゃなくて、きりたんぽを食べるんです」

ビニールハウスの脇を通つた時、ふと頭を過つたのは後輩の何気ない言葉だった。五つ年下の彼は秋田の山奥の出身だった。全校あわせて二十名にも満たない小学校に通つていたと聞かされた時には、映画や小説にでも出てきそうな話だと思つたものだ。

「きりたんぽは、古いお米じゃなくて、新米で作るもんなんですよ」

彼からきりたんぽの話聞いたのは、昼休み中の雑談だっただろうか、それとも宴会の席だったのだろうか。おそらく、まだ個人的に親しくなる前の話だ。

黙々と歩いていると、どうでもよい、どうしようもないことばかり思い浮かんでくる。後輩のことも、ヘミングウェイのことも、また、ヘミングウェイを好きだった彼のことも。

交友関係はそう広い方ではないが、秋田出身の知り合いが二人いる。一人は会社の年下の後輩で、もう一人は大学時代の友人だった。ヘミングウェイの著書をくれたのは——厳密に言えば私の部屋に置いていたのは、大学時代の友人だった。

捨てることも、読むこともなく本棚に埋もれていた本を見つけると、彼が一番好きだと言っていた短編小説、『二つの心臓の大きな川』を読んですぐに私は秋田行きを決めた。時間だけは余るほどあったので、インターネットで旅館に予約を入れ、翌朝、東北新幹線に乗り込んだ。

『二つの心臓の大きな川』は、簡潔に言えば主人公のニックが川で釣りをする話だった。徹底した写実主義の文章は内情を語ることはなく、何故彼が鱒釣りに来たのか、その理由もその心情も明確に示されることはない。友人はこの話を、ニックが第一次世界大戦で負った心の傷を、自然の中で癒す物語だと語っていた。文庫巻末の解説でも似たようなことが書かれていたから、おそらくそれが一般的な解釈なのだろう。

けれど正直なところ、一読しただけではその解釈が妥当かどうか、判断するのは難しかった。そもそも小説の中に、戦争についての記述は一切ない。ただ何等かの理由で、ニックの降り立った駅周辺はかつてあった街を失い、原野へと変わり果てていた。酒場も家も跡形もなく消え去り、残っているのは焼けただれた土地と砕けた礎石^{せき}だけ。

だが、人の街を葬ることはできても、自然を破壊しつくすことはできない。変わらざるあり続ける川を、水の中で生き生きと身を躍らせる鱒をニックは目撃する。初めから終わりまで、心理描写はほとんどない。ニックが歩く松の平原、小高い丘、突き進む中手折ったニオイシダの匂い、キャンプの様子、釣ったばかりの鱒をナイフで処理する克明な描写が続くばかりの、わかりづらい話だと思った。

それでも読み終わった後、川が見たくなかった。十年近く前に写真で見た川が、未だ変わらず存在しているのか確かめてみたいと思った。

私が抱返り溪谷について初めて知ったのは、大学時代だった。同じ映画研究会の加藤は秋田出身だった。加藤とは映画の趣味は合わなかったものの、それ以外では馬が合った。授業の空き時間には、よく学食で色々な話をしたものだ。くだらない芸能人のゴシップから、未来への展望まで、他の友人達には照れくさくて言えないような話も、彼にだけは打ち明けることができた。

加藤との話題で多かったのは、本の話だったと思う。映画の趣味も本の趣味も、私達の好みは百八十度違ったが、映画の話になるといつも言い争いになるというのに、不思議なことに本の話になると、互いの真逆な意見も尊重することができた。

加藤はヘミングウェイが一番好きな作家だと公言していた。当時、彼の著作を一冊も読んだことがなかった私は、何から読み始めればよいかと、加藤に尋ねたことがあった。そうして奨められたのが、『二つの心臓の大きな川』だった。

あらすじを聞けば、主人公が鱒釣りのために川へ行くだけの話だと、何とも言えない答えが返って来た。

「ちっとも面白くなさそう」

素直な感想を伝えると、加藤は「俺が一番好きな話なんだ」と笑って、それから秋田の仙北市にあるという、抱返り溪谷について話し始めた。

「青い川が流れる溪谷でさ。上流にある玉川温泉が原因で、水質は悪いんだけど、見た目は本当に綺麗なんだ。『二つの心臓の大きな川』を読む度に、なんでだかこの川を思い出すんだよ。まあ、酸が強過ぎて鱒釣りをするのは難しいだろうけど」

会話の途中、携帯電話の画面に表示された溪谷の写真は素晴らしく、私は目を奪われた。ただ、新緑に囲まれた川面のきらめき、不思議な水の色合いは美しすぎてかえって人工的な気がした。鮮やかな絵の具をたっぷりの水で溶いたような、あるいはブルーハワイのシロップを氷で薄めたような色、とでも言えばよいただろうか。

目の覚めるようなライトブルーは確かに写真映えるものの、生き生きと魚達が泳ぐ姿は想像できず、続いて見せられた滝の写真の方により心惹かれた。もちろん、彼には言わなかったけれど。

抱返り溪谷の話は、加藤と疎遠になってからも、大学を卒業して就職してからも、頭の片隅に残っていた。だから菅原が秋田県出身だと知った時、私は抱返り溪谷に行ったことがあるか彼に尋ねてみた。

「名前は知ってますけど、実際行ったことはないですね」

あの頃、菅原はまだ私に敬語を使っていた。会社での会話だったし、当時はプライベートでの付き合いもなかったから当然といえば当然だ。その後の約二年間、彼は職場を離れた場所では、同い年の友人と話すような言葉を使うようになったけれど、仕事以外で顔をあわせなくなった今、菅原の言葉遣いはまた元に戻ってしまった。

それでも三日前、ドア越しに聞いた彼の声は、私の下の名前を何の敬称もつけずに呼んだ。苗字以外で呼ばれるのは別れて以来初めてだった。

話好きな加藤と違って、菅原は口数が少なかった。食べたいものを聞いても、行きたい場所を聞いても、何でもよい、どこでもよいと言うばかりで、私はそれがずっと不満だった。

そんな彼が、一度だけ自分の方から誘ってきたのが抱返り溪谷への旅行だった。交際して二年目の夏、抱返り溪谷に行かないかと、ベッドの中で言われた。泊りで行くのかと尋ねると、そうだと返って来たので、実家にも寄るつもりかと更に質問を重ねると、今度は肯定の言葉は返ってこなかった。困ったような顔をする後輩に背を向け、その日は眠った。結局、抱返り溪谷に行く前に私達は別れ、その夏は九州へ一人旅をした。

ひと気のない道を、歩き進めてかれこれ三十分、いや四十分だろうか。それでもまるまる一時間を経過する前には、駐車場に到着した。大きな駐車場だったが、オフシーズンのためか一台の車も止まっていない。

抱返り溪谷という名前は、人がすれ違う時、互いに抱きかかえるようにしなければ通れないほど狭い山道だったことからつけられたものだと、仙北市のホームページに書かれていた。だが、それも今や昔の話なのだろう。散策路の道は舗装されており、道幅は抱き合わずとも充分すれ違えるだけの広さで、ハイキングなど久しくしていない私にも歩きやすかった。

ただ一つ不満を上げるとしたら、静かすぎることだった。いや、不満という表現は正しくないだろう。私はきつと、不安なのだ。

頭上を見上げれば、長い腕を伸ばした木々の葉が、陽光を浴びて眩しいほどに鮮やかだった。

私の他に観光客はいないようで、聞こえる足音は一つきり。なるべく人がいるところは避けたかったから、駅から出ている宿へのシャトルバスにも、タクシーにも乗らなかつた。

それだというのに、いざ一人で山道とも言えない、なだらかな道を歩いていけば、得体の知れない不安に襲われる。世界に自分だけが取り残されてしまったのではないかと、馬鹿げた錯覚に陥って、こんな自然の中だというのに息苦しくなる。

抱返り溪谷に来たのは、部屋で鬱々うつろとしていた自分にうんざりしたからだ。それでも知っている人間と遇うかもしれない場所には行く気になれず、見知らぬ土地に旅立ちたかつたからで、綺麗な空気を思い切り吸いこんで、加藤が綺麗だと言った川がまだ存在するのか、この目で確かめたかつたからだ。

けれど、本当は逃げたかつただけなのかもしれない。そうして、逃げた先で癒されたかつたのかもしれない。

硬質な文章をじっくりと目で追つても、傷ついた男が癒されていく様を、ヘミングウェイの小説から読み取ることではできなかつた。それでも、『二つの心臓の大きな川』が再生の物語なのだと思じたかつた。自然の中に身を置けば、沈んだ心も、魔法のように晴れやかになるのだと思いたかつた。

だが、緑の中をいくら歩いてても、心は穏やかになるどころか、かえって波立っていく。聞こえてくるのは自分の足音と、息遣い。鳥の声が交じることもあるが、私が自分の殻に閉じこもっているせいか、囁ささやくりはひどく遠く聞こえる。

ただ、私はまだ川を目にしていない。写真通りのライトブルーを目に映せば、確実に何かが変わるはずだ。そんな期待を抱いて前へ進むが、枝の隙間から、写真で見ると透明度の高い青が見えても、依然として動悸は早いままだった。

まだ渓谷の散策路に入って数分しか経っていないが、額には汗がにじみ、手足が泥のように重く感じられた。立ち止まって、呼吸を整えたいという気持ちもあったが、体の疲労よりも歩みを止めることへの恐怖が勝った。

結局休むことなく進み続けると、ほどなくして赤い橋が現れた。駐車場からもこの橋が見えた。山と山を繋ぐようにかかった橋は、入口からは随分遠くにあるように思えたのだが、案外近場だったらしい。

神代駅の駅舎同様、想像していたよりもずっと立派な橋だった。足場は頑丈で、大人一人が歩いたところで、びくともしない。橋を渡りながら視線を下へ落とすと、先ほどよりかはつきりと川が見えた。

青い川だった。強酸性のため、魚が住むのは難しいと聞いていた気がするが、所々に波紋が広がっているのを見るに、もしかしたら、小魚くらいはいるのかもかもしれない。

ゆっくりとした歩みではあったが、立ち止まることなく橋を渡り切ると、先に続いていたのはなだらかな坂道だった。橋を渡る前よりも、土の匂いを強く感じる。早朝にでも雨が降ったのか、舗装されていない道はややぬかるんでいた。

足裏の感触は、都会にいた時と違って柔らかい。スニーカー越しに小石や湿った土、水分を含んだ葉を踏みしめているのがわかる。低いヒールで音を立てて歩いた固いコンクリートも、フロアに敷き詰められた絨毯の感触も、渓谷においては幻のように遠かった。

こんな風に体を動かして、汗をかいたのは一体いつぶりだろう。冷や汗やら、脂汗をかくことはあったものの、太陽の下で、立ち上る草の匂いと土の匂いに包まれながら、額の汗を拭うことなどここ数年なかった。日の光を浴びることさえ、久しぶりのような気がする。

今でこそ両手に余るほどの時間があるが、つい一週間前まで、私は時間に追われるだけの日々を過ごしていた。まだ暗いうちに自宅を出て、日中はビルの中で働き、日が落ちて、子供ならとうに寝静まる頃に帰宅する。

仕事が嫌いなわけではなかったが、本当にやりたい仕事なのか、やりがいを持てる仕事なの

かと聞かれれば、首を傾げるしかなかった。就職活動中は興味がある職種よりも、福利厚生が手厚そうな会社を優先して企業回りをした。それでも、第二志望の保険会社から内定を貰った時は嬉しかった。電話を貰って、喜んだはずなのだ。それだというのに、あの時感じた思いをどんなに頑張っても今は思い出せない。

就職してからの九年間、目の前に仕事があれば必死で取り組んだし、周囲に評価されればそれなりに励みにもなった。結婚した友人達から、聞きたくもない子育ての話を聞かされて苛立つことがあっても、他人の人生と自分の人生を比べるべきではないと自身に言い聞かせ続けた。安定した仕事があって、両親は健在。恋人はいないが、愚痴を零す友人はいる。私は幸せなはずだった。

けれど二か月前、ふいに送られてきた加藤のメールを読んでから、急に何もかもわからなくなってしまう。大学時代、加藤とは友人だったが、一度だけ、当時住んでいたアパートに彼を泊めたことがある。

大学生活の四年間、加藤は地元の年下の後輩と遠距離恋愛をしていた。人懐っこい性格から、それなりにもてるようだったが、私の知る限り恋人を理由に加藤は告白を断り続けていた。

そんな彼から、家に泊って行かないかと誘われた時は驚いた。私達は親しい友人で、休日に

二人で出かけることもあったが、互いの家を訪れたことは一度もなかった。サークルの友人達と一緒に、加藤の家に押しかける機会はいくらでもあったが、彼を好きだと自覚した時、それだけはしてはいけないと、自分自身に課していた。

あの日は確か、サークルの飲み会帰りだった。皆で駅に向かって歩いていたはずなのに、いつの間にか二人きりになっていた。私達は二人とも地方の出身で、大学の近くにアパートを借りていた。加藤の家よりも、私のアパートの方が飲み会の会場である居酒屋から近かった。だから、「うちの方が近い」と思ったことをそのまま告げたのだ。

私の言葉に彼は頷いて、その夜泊まっていった。翌朝、何事もなかったような顔をして私は加藤を見送った。あの日のことを、互いに口にしたことは一度もなかった。

ただ、彼は一冊の本をベッドに置いていった。意図的に残していったのだと思ったから、あえて返そうとはしなかった。

加藤とは大学を卒業して以来、会っていない。共通の知人から、数年前に転職して、今は小さな映画の配給会社に勤めていると聞いたことがあるが、直接連絡を取り合うようなことはなかった。

そんな彼から、メールが届いた。近況と、陳腐な愛の言葉を述べたメールの結びは、「返事

はなくてもかまいません」というものだった。

映画研究会には、映画好きの者が沢山いたが、皆趣味だと割り切っていた。最終的に、映画に関わる仕事についたのはきつと加藤だけだろう。給料は安い、やりがいのある仕事をしている。今の仕事が好きだ、幸せだと何のてらいもなく言い切る加藤に嫉妬した。

今更、実はずっと好きだったのだと告げられても、学生時代の恋愛感情を掘り起こすことは難しいのに、彼と語った映画や本についての記憶は、昨日のことのようにまざまざと思ひ出された。

もう何年も、映画館で映画を観ていない。子供の頃に憧れた職業にも、なりたかった自分もなれなかった。世の中には、むしろ夢を叶えた人間の方がずっと少ない。そんな言葉で自分を慰めてきたけれど、加藤のメールを読んで、これまで自分が夢を追おうとさえしてこなかった事実、ようやく向き合うことになった。どうせできやしないと初めから諦めて、目の前にある仕事に打ち込むことで、孤独感からも、惨めさからも背を向けて。

抱返り溪谷にある回顧みかえりの滝までの道のりには、いくつかの橋とトンネルがあった。昼間ではあるが、洞窟の中は暗い。縫すがるものが欲しくて、壁に手をつきながら前へ進んだ。岩肌はごつごつとしていて、滑らかとは言い難い。手のひらに時折尖った部分が食い込むが、何の支えも

ないよりはましだった。

もしも、私が今ここで倒れたら、両親は、友人は、職場の同僚達は何を思うだろう。死因は何でもいい。急な心臓発作で倒れるだとか、熊に襲われるだとか。一人ひっそりと逝った私を、皆は憐れむだろうか。可哀そうにと嘆くのだろうか。

外の日差しの強さとは対照的な、冷えた空気を胸に吸い込む。手のひらに痛みを感じながら、まだ死にたくないな、と思った。

昨日まで、やりたいことが一つも思いつかずに、家で寝ているだけだったというのに、いざ死を想像すると、まだやり残したことが沢山ある気がした。

昔は欲しいものや、やりたいことが山ほどあった。夢も持っていた。なりたい自分を、簡単に思い描けた。あの頃の私はもういない？ 死んでしまった？ いや、違う。まどろんでいるだけで、きつと今もどこかにいるはずだ。

洞窟の外に出ると、滝があった。眩しさに目を細めて、激しい水の打つ音に身をすくませたが、それは一瞬のことだった。

何度か瞬きを繰り返すと、私は早足で滝へと近づいていった。足下に流れる青い川と違って、山の上から岩を滑り、音を立てて流れ落ちる滝は白い。勢いよく流れた水が岩場に砕け散り、

霧状になって頬を掠めていく。

喉の渴きを無性に覚えて、リュックサックから水筒を取り出した。水を沢山入れて来たので、中の麦茶はよく冷えていた。砂漠で倒れ伏した旅人のように喉を鳴らして麦茶を飲むと、ひび割れそうだった唇から体中に水分が染みわたっていく。口の端から零れた液体が、顎を伝い鎖骨まで流れたが、暑さで火照った肌にはちょうどよかった。

青葉と水の匂いをまとった清涼な空気を、大きく胸に吸い込んだ。痛むほどだった胸の鼓動は、いつの間にか穏やかになっていた。

十日前、会社を辞めようと思った。簡単な引き継ぎ書と辞表を用意して、上司に自分の意思を伝えた。

残業は多いが、決して悪い会社ではなかった。月八十時間以上働くことはあっても、百時間を超えたことは流石にないし、残業代だっていくらかは出るのだ。私は恵まれている、不満を抱くべきではない。不満を抱いたところで、私を必要としてくれるのなんて、今の会社くらいものだろう。だから、我慢するしかない。加藤のメールを読むまで、そう思っていた。

「辞めさせてほしい」と告げると、働き過ぎで疲れているのだと上司は言った。それから暫く休んだ方がよいとも。休暇は沢山残っていたから、勧められるがまま休みをとることにした。

翌日、職場の同僚達から沢山のメールやラインが送られてきた。

「悩みがあるなら話を聞くんよ」

「何か不満があるの？」

「皆、心配してるから」

どれも善意に溢れた言葉だったが、誰にも返事はしなかった。上司にだけは、今後の事務的な話を進めるために返信しておいたが、後は全て見なかったことにした。菅原からも連絡が来たが、彼からのラインは読みさえしなかった。

既読にならなかつたことに不安を覚えたのか、三日前、菅原が家を訪ねて来た。別れて以来、彼が私の部屋のドアを叩くのは初めてだった。一年ぶりにそのドアを開けるべきだったのかも知れないが、何を話せばよいのかわからなかつたので、やはり無視を決め込んだ。

滝を見上げながら、私はドア越しに聞いた菅原の声を思い出していた。話がしたい、ドアを開けて欲しいと、訴える彼の声は必死だった。

別れを切り出したのは私の方からだった。彼が好きだから付き合っているのか、結婚したいから付き合っているのか、わからなくなつたから別れた。

自分でもいい歳をして、面倒臭い女だと思う。私が別れたいと言うと、菅原は別れたくない

と言った。いつも何を聞いても、何でもよいと返すくせに、この時の彼は頑なだった。それでも「じゃあ、今すぐ結婚できる？」と吐き捨てれば、菅原は傷ついた顔をした。大学を卒業したばかりの年下の男に、ひどいことを言ったかもしれない。

恋人同士でなくてもセックスはできるし、愛がなくても結婚はできる。やりがいなんてものが見出せなくても、食べていくためなら働くことだってできる。むしろそうすべきだ。そう思っていた。そう思わなければならないと、信じ込んでいた。でも、きつとそうじゃない。

働くことも、誰かを愛することも大事なことだろうが、偶たまにはゆつくりと、自分の幸せについて考えてみてもよいのだと思う。そんなことは贅沢だと思ってきたけれど、贅沢をしてはいけないと誰に言われたわけでもない。私が勝手に、駄目だと決めつけていただけなのだ。

『二つの心臓の大きな川』で、ニックはやたらと美味そうに、スパゲティやパンケーキを食べていた。テントの傍で火を焚いて、フライパンの上で缶詰のビーンズとスパゲティを温めて、トマトケチャップで味付けをして。それだけの料理が、極上の食事に思えたのは何故だろう。

本の内容を思い出すと同時に、昨日の昼から、碌なものを口にしていないことを思い出した。職場を休み始めてから、体重が四キロ減った。食べたいものが特に思いつかなかつたし、自分のために料理をするのも億劫だったのだ。

だが、久々に空腹を覚えた。新幹線で食べようと思つて買ったものの、珈琲で腹が膨れてしまい、結局食べられなかったおにぎりをリュックから取り出す。ラップをむいて齧りつくと、歯に触れたものは思ひのほか固かった。三角形に整えるため、ぎゅうぎゅうに押しつぶされた米に、やたらと味の濃い中身のツナ。あらかじめ海苔が巻かれたタイプのを買ったので、ふにゃふにゃになった黒いものが唇や歯に張り付くのがわかる。それでも、立ったまま食べたその握り飯は、今まで食べたどんなものよりも美味しく感じられた。

もしもこの場にヘミングウェイがいて、私の今の心情を描写してみたと頼むことができたなら、彼はどんな文章を紡ぐのだろう。どうせなら、美しい詩のように甘く、切なく表現して欲しい。ただ、わかりきったことはあえて省いてしまう彼のことだから、事細かにコンビニのおにぎりについて描写して、あとは勝手に読み取ってくれと言われそうな気もする。そんなことを考えて、一人で笑つて、一人で目の端を拭つた。

おにぎりを食べ終わると、水筒の中の麦茶をまた一口飲んだ。まだ食べられると思つたが、生憎と残る食料は飴玉だけだ。包み紙をとり、ミルク色の球体を口の中に放り込む。舌で甘い飴玉を転がしながら、溪谷を出たら、どこかでまともな食事をとろうと思つた。それから、少しずつよいから返事をしよう。友人にも、同僚達にも、菅原にも。

返事はなくてかまわないと書かれていたが、加藤にもメールを送りたいと思った。彼とは昔の恋の話ではなく、昔語った夢や映画の話をしたかった。ヘミングウェイを、ようやく読んだのだと伝えたい。

滝は流れを止めることなく、川へと落ちていく。岩場に転がる流木には、苔がむしていた。この先、積み重なった石が転がり、澄んだ水の川が濁るようなことがあったとしても、きっとこの水の流れだけは止めることができない。私が年老いても、私が死んでも、きっとこの滝は変わらずここにあり続ける。

そろそろ帰ろうか。もう少しだけ、ここにいようか。少しだけ迷って、私は元来た道を帰ることにした。振り返った先に見える滝は確かに名残惜しいが、次の機会はいくらでもある。私さえ望めば、その日はこの先いくらでも訪れるだろう。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

錦 秋

東京育ちの私には、高層ビルやネオンサインの方が野山よりもずっと身近な存在です。

先日、秋田の大曲駅に生まれて初めて降り立ちました。駅から受賞式会場の横手市に向かう車中、窓から赤く色づいた山々を眺めていました。秋田在住の方々にとっては日常風景なのかもしれませんが、私にとって山は非日常の存在です。山だけでなく川も田畑も、コンクリートに囲まれた都会の生活の中では滅多にお目にかかれません。

学生時代、漢文の授業で杜甫の『春望』という詩を勉強しました。文系にも関わらず、私は漢文が大の苦手科目だったので、『春望』



表彰式での夢野さん

夢
野
寧
子

の「国破れて山河あり」という出だしだけは今でもはつきりと覚えています。

当時の私は「国がなくなっても、山や河は残ってるなんて自然ってすごいわあ」とごく単純な感想を抱いたのですが、時々今でも似たような思いに駆られることがあります。

都会育ちだからでしょうか、私は自然に対する憧れが人一倍強く、だからかどうかはわかりませんが、気持ちが塞いでいる時には山や川へ出かけたくなります。あくまで出かけたくなるだけで、実際にはパソコンの画面越しに自然を眺めて——例えば抱返り溪谷のライトブルーの川や回顧の滝のような——いつもであればそこにいる自分を想像するだけで終わってしまうのですが、幸運にも今秋はふるさと秋田文学賞を頂いたおかげで、秋田の自然を肌で感じる事ができました。

稲刈りの終わったばかりの田んぼを見るのも、紅色の鳥海山を見るのも初めての経験でした。本当に美しい秋色の光景でした。いつの日かあの景色にふさわしい物語を、文章を紡ぐことができるように、日々精進していきたいと思います。

最後に、本賞に関わられた全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。

第4回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

みずのたたき、てふてふの花

渡部 麻実・作

みずのたたき、
てふてふの花



少し、私の父の話をしてもいいですか。父はラーメン屋の息子でした。父には二つ上の姉がおり、家族四人の暮らしぶりはそこまでよくなかったそうです。店は昼から営業し、夜にはつまみなども出していて、子供たちが酔客の相手をさせられることも多かったといいます。それで酒が嫌いになるかと思えば、父は死ぬ間際まで飲むことが好きだったので不思議なものです。小さいころは体が弱く、よく三色粥というものを食べさせられたといっていました。生まれたのは終戦前ですから、物資がとぼしく三色の中身はさつまいも、玄米、そしてよもぎなどの雑草でした。私はてつきり三色とは鮭や梅干し、昆布などのおかずを三種類、白粥に混ぜたのだと思っていたので、初めて聞いた時はびっくりしました。父はその思い出のせいか、さつまいもが嫌いでした。母と私が反射式ストーブの上でいもをアルミホイルに包んで置いておくのをいつも苦々しい顔で見ているのを思い出します。

戦後の混乱の中、父の家は闇市でうどんを出し、そこからラーメン屋に転じていったといえます。父の母、つまり私にとっては祖母に当たる人がおもに切り盛りしていたらしく、祖母が亡くなったあとほどなくして店は閉店してしまっただけです。祖母が亡くなってから生まれた私は、残された祖父がどんな仕事をして暮らしていたのかよく知りません。父の姉とずっと一緒に暮らしていましたが、いつもこたつの上座に座りニコニコと笑っていた記憶しかありません。

ん。客商売をしていたことがあるとは思えないほど物静かな人で、その声を聞いたことも数回しかありませんでした。亡くなる数時間前、これは父の姉から聞いた話ですが、それまでほとんど寝たきりだった祖父が急に立ち上がり、ふらふらと廊下へ行くと、そこに置いてあった段ボールなどの狭い隙間に入っていく、聞いたことのないような大きな声で自分の名前を言ったあと、力強く敬礼をしたそうです。祖父は召集され戦争に行つたものの、体の何らかの理由で前線に行くことなく返された人でした。そのせいか戦争の話は一度も聞いたことがありません。そんな彼がなぜ死の間際になっていきなり軍人のようなことをしたのかわかりません。戦争に對して、なにか強い後悔や劣等感があつたのでしょうか。広い敷地の奥に建っていたため、昼間でもあまり陽が入らない薄暗い居間でいつも微笑んでいた祖父のことを思い出すたび、もう少しなにか話をすればよかつた、聞いてみればよかつたという後悔のようなものが消えませんが、その古い家も再開発のために国に買われ、今はもうありません。

父は待望の男の子、しかも末っ子ということだいで甘やかされて育つたそうで、いつも自分が世界の中心にいなければ納得しない人でした。母と私が台所で話しながら家事をしていると、機嫌が悪くなり、ある時は「二人で俺の悪口を言っている」と疑われたこともありまして。いただききもののお菓子なども全て父が開け、父が一番最初に食べなければいけませんでした。

それは家長だからという感じではなく、いつまでもわがままな子供のようなふるまい方でした。

父の両親は、父が高校を卒業したらどこかへ就職させるつもりだったそうです。ラーメン屋を継がせるつもりはなかったようですが、大学へ進学させる予定もお金もなかったといっています。しかし父は高校二年生の時に模試の成績で全県一番を取り、そのため校長と担任が連れだつて家に来て、強く進学をすすめたのでした。そのため祖父と祖母は借金をして父を東京の大学へやることにしました。中卒だった祖父母にとって父は自慢の息子だったようです。けれども父には及ばずとはいえ、かなり頭の良かった父の姉は「女には学問は必要ない」の一言で進学は許されず、知り合いの洋品店へ勤めに出されていました。私が幼い頃は既製品にはないデザイナーや生地で、従姉妹の二人とおそろいのワンピースをよく作ってくれました。彼女から進学できなかつたことについて一度も不満を聞いたことはありませんが、私が中学校に入学した時も、高等学校に入学した時も、入学祝としては多すぎる金額を包んでくれました。また、彼女の二人娘はどちらも良い高校を出て、よい大学へ進み、クラスで一番の成績で卒業してよい企業に就職しました。いま思えばあれは金銭的な理由や性別のせいで進学できなかつたことに対する、叔母の抗議の現れだったような気がします。娘たちは母の望みを確実に叶えたのでした。

父と母は、母の遠い親戚が父の大学生時代の親友だった関係で知り合ったそうです。当時世

田谷に住んでいた母の家に、その彼と一緒に遊びに行ったのがきっかけで母を知り、高校生だった母が大学に入学するとすぐにプロポーズしました。父は母より五歳年上でしたので、すでに就職しており、その転職に合わせたプロポーズでした。決してよいタイミングではなかったのですが、母は転職という言葉に焦ってしまいあまりよく考えないまま承諾してしまったとよく言っていました。遠い離島への転職でしたので、入ったばかりの大学もやめなければならず、母はそのことをずっと後悔していました。

父の仕事は銀行員でした。たとえ一円合わなくても、行員全員が残って計算をしなおし、帳簿が全てクリアになるまで帰れないのだと、父は酒を飲むたびにため息まじりに話していました。けれどもその言葉尻にはそこはかかない自慢と自信が溢れ出ていました。俺はラーメン屋の息子からここまでの上があった、その金でお前たちを食わせてやっているんだ、というような。全ての出入金がびったりと噛み合うと、五時の終業の鐘とは別の鐘の音が鳴るといいます。それを聞くと行員皆が拍手をするそうです。おかしいだろう、いい歳をした大人が毎日毎日拍手なんて。そういう父の顔は赤く紅潮して、それが興奮からなのか酒のせいなのかは、いつまでもわかりませんでした。ただ、父が歳をとってから家に遊び来た父の友人たちは誰も口をそろえて

「お前はたとえどんなに酔っ払っていても、宴会の最後には一円単位で割り勘の額を正確に出してきて、全員から回収すると一人で拍手してたっけなあ。会計係はお前の永久欠番だよ」と言っていました。私にはそれが父をバカにしているように聞こえたのですが、それを聞いた彼はただ満足そうに笑っただけでした。

母は芯の強い人だったと思います。ひたすら父の機嫌を損ねないように、どんな時も父をたてるようにとただそれだけを気にして、確実に遂行しようと努力しているように見えたのは、きつと父がへそを曲げて、理不尽になじられるストレスに彼女自身が耐えられなかったからでしょう。父を一番に考えているように見えて、その実、母は自分が一番大切だったのです。母は父がどんなに酒を飲んで帰ってきてきても水の一杯を用意することもしませんでした。父は能面のように心を隠した母の顔を一瞥すると、水の代わりにウイスキーの水割りを自分で作って飲み

「本当に色気のない女だな。人形みたいな顔をして」と言うのと、自室に帰っていききました。母は眉ひとつ動かしません。その視線の先にはなにもありませんでした。それがいつもの私の家の夜の風景でした。

父が自室に戻り、やがて高らかないびきを奏で始めると、母はおもむろに趣味のポーセラーツの道具を出してきて、リビングの机の上一杯に広げました。そうしてやっと母は笑うのです。まるで氷が溶けて、中の何かがあふれ出るように柔らかい表情に戻った母は

「見て、キコちゃん。綺麗でしょう。新しい転写紙が届いたの。取りよせるまでに何週間もかかったのよ。見ているだけで幸せになるわね」

とうっとりとした口調で言いました。私はそんな母を見てさつきまでの母よりも、今の母の方が何倍も怖いと思ってしまうのです。

ポーセラーツとは真つ白な磁器に、転写紙と呼ばれるシールのようなものを自分で場所を決め、デザインして貼り、それを焼成窯で高温で何時間も焼きつけるものです。転写紙はほとんどがアールデコ調のクラシックな柄が多く、母がその趣味を見つけてから我が家にはヨーロッパの貴族がティータイムで使うような花柄のカップやソーサーがいくつもいくつも揃えられていきました。縁にたくさんの花とリボンがデザインされた大皿に、餃子が並べられて食卓の上に置かれた時、私はもうそのあまりのシュールさに笑うしかありませんでした。母がどんなに食器を着飾ろうとも、それを使うシチュエーションが我が家には圧倒的に少なすぎたのです。母が望んで私に習わせたバレエもピアノも、私は早々にリタイヤしました。背が低く、手足が

短く、指が太くて、髪をのぼしていなければ男にも間違われるような顔つきの私は、母の望むような娘ではなく、一緒に花柄のお皿で何時間もおしゃべりしながらケーキを食べるような仲ではありませんでした。

私は陸上部に所属していて、マラソンを走るのが好きでした。体格的にも体力的にも決して運動に向いているとはいえない私が、ドタドタと重い体を引きずりながら走る姿はどんなに滑稽だったでしょうか。でもどんなに遅くても走り続けることが好きだったのです。記録や大会には興味もなければ、もちろん出られるほどの成績でもありませんでした。ただ長い距離を走るといふ単純作業が好きだったのです。苦しくなると、私は空を見上げました。父は四十歳代で故郷の秋田へ家をかまえていました。生まれ育ったこの街の空は、季節に関わらず、ほとんど曇天で太陽のない空でした。そこにはどんなに苦しくても救いになるようなものはなにも見えませんでした。父のことも母のことも嫌いではありませんでした。けれども好きでもありませんでした。そこに父と母がいるから、私たちは家族なのです。ただそれだけ。存在しているというだけで、そこに特別なつながりも愛情も感じることなく私は育ったのです。

陸上部としての成績はまったくありませんでしたが、マラソンのおかげでついた体力のせい

か病気をすることがなく、皆勤賞といういまだきめずらしい賞をもらったおかげで、私は希望の高校に推薦で進学することが決まりました。県内では二番目に成績のよい、女子高でした。教師が一番上の共学も狙うことはできると言いましたが、私は首を振りませんでした。女子高がいいんです。そう強く言うと、教師はそれ以上なにも言いませんでした。

母は社会に出ることなく、最初に付き合ったのが父でそのまま結婚したため、恋愛というものに深い意味はなかった。漠然とした嫌悪感を抱いているようでした。母だって新婚時代や、その前の交際期間には楽しいことがあったはずなのです。でも母はそんな自分の中の女の部分を、ひどく嫌っているように見えました。その頃の話聞いても、返ってくる答えはピンク色の恋愛などではなく、初めから亭主関白を通そうとした父の横暴さだけでした。そしてそんな自分に重ねるように、私にも付き合うのは結婚する人、それまでは処女でいるようにとずっと言い聞かせていたのです。そんな母の思い通りになるために、私は自ら女子高を選んだのでした。いえ、当時はそこまで深く考えていなかったかもしれない。処女という言葉の意味もよくわからず、聖書の解釈本を読んだりしていましたから。けれども母の教育は成功していたのです。タオルに少しづつ染み込んでいく汗のように、少しづつ少しづつ染み込んで、気づいた時には絞れるほどに、私は自分の中の女をできるだけ出さない術を、なんとかして身につけようとし

ていました。

そんな私にポーセラーツの少女趣味の皿は、受け入れがたいものでした。私にそうやって女を押しこめるよう教育した母は、少女趣味の皿で自分の中の女を解放していたのでしょうか。私が女子高に通い始めるのと同時に、母は自宅の一室を自分のアトリエとして改装して、自宅サロンを始めました。教室には娯楽の少ない田舎ならではの暇な主婦がわんさかやってきました。そこでやっと母のかわいい子供たちはたくさんお披露目される機会を得たようでした。父はそんな母のふるまいには興味がないようで、ただ自分の酒の買い置きを切らさないこと、食事の準備が遅れないこと、出来合いの総菜は買ってこないことだけを母に言い渡しました。母は父の理解ある姿勢に「ありがとう」と言った裏で、私には「結局ただの家政婦なのよ、あの人にとっての私は。ああ、東京へ帰りたいたい。世田谷のあの家ならきつともっとたくさん趣味のよい生徒さんが集まるのに。」と言うのでした。その表情からはいつものような感情も読み取れませんでした。

私は、恋愛とは無縁の高校三年間を送りました。まわりの友達は「女子高生」という肩書を存分に生かして、合コンだ、サークルだと精力的に恋人作りを楽しんでいましたが、私は授業以

外の時間のほとんどを図書館で過ごし、放課後はまた陸上部のいてもいなくてもいい部員としてただひたすら長距離走に打ち込みました。最初こそ記録を取ろうとしていた顧問の教師も、私がただ同じペースでひたすら長く走ることだけを目標としていることに気がつくとも、まるでいないかのように私の存在を消しました。それは私にとっても好都合でした。高校三年の春、担任は私の成績と出席日数を鑑みて、一番条件のよい大学への推薦入学を勧めてきました。彼女が示したのは中くらいより少し上の地元の国立大学の英文学部で、私は特に英文学に興味があったわけでもないのですが、勧められるまま入学願書を提出しました。進学でも就職でもどちらでもよかったです。私は自分の将来にたいして深く考えたことはありませんでした。行ける大学があり、それが父と母の意向にそぐわないものでなければそれで十分でした。

担任の言うとおり、私は推薦入試で大きなミスをすることもなく、その学年で一番最初に進路が決まった生徒として進路相談室に名前が貼り出されました。私よりずっと切実に自分の将来を考え、悩み、時に泣いたり笑ったりしている彼女たちに申し訳ない気持ちで私は貼り出された自分の名前をただ長いことぼんやりと眺めていました。まるでマラソンの途中に眺める曇天のように。

大学進学が決まり、高校卒業までに時間のゆとりができた私は運転免許を取ることにしました。父は合格祝いとして中古の軽自動車を買ってくれと言いました。それは私が生まれてからもらった中で自転車の次に大きなプレゼントでした。赤い小さな軽は、私が免許試験に合格するちよつと前に、私の家にやってきました。せっかちなところは、金に細かい父のもうひとつの特徴でした。たとえ免許が取れても高校の規則で卒業までは車の運転はできないことを父に話すと、彼は機嫌を悪くすることもなく小さく「そうか」と言い、毎週日曜日になると隅から隅まで丁寧な車を磨き、ワックスをかけ、私が乗る日まで欠かさずメンテナンスをしてくれました。その愛情のかけ方は、私のためにとより、自分が金を出したものだからという執念のようなものを感じずにはいられませんでした。

卒業式の翌日、私と父はさっそくその必要以上にピカピカに磨かれた中古車に乗ってドライブに出かけました。といっても特に行くあてがあるわけではなく、狭い街中を父の勤める銀行を眺め、よく行くスナックのある飲み屋街を流し、そのまま海辺の町まで走ると、ときとうにさびれた定食屋に車を停め、向かい合って海鮮丼を食べました。父はビールを飲みながら

「思ったより運転うまかったなあ。駐車も問題なさそうだし、お前は見た目よりはこういうのに向いてるのかもしれないな」

と言いました。

「こういうのって？」

「見た目はどんくさいのに、走ったり、運転したり、意外と運動能力があるのかもしれないってことだよ」

父の失礼な言い分にも、私はただ「そうか、私はそんなにどんくさく見えているのか」と思うだけでした。会計の時、レジの前に立った父が大きな背中を小さく丸めるようにして小銭入れに手を差し入れ端数のコインをきっちり支払おうとする姿は、夏のある日に家の前で丸まって干からびていたダンゴ虫のようでした。どんくさい娘とダンゴ虫の父親。私たちは結構お似合いの親子なのかもしれません。

大学生活も高校生活と大きく変わるものではありませんでした。徒歩通学が車通学に、同じ教室の中に女性だけではなく男子学生がいる、目に見える変化はそれだけでした。そしてもう一つだけ変わったのは、私が走ることに興味をなくしたことです。車でどこまでも移動できるとなると、もう走ってどこか遠くの空を見に行く必要がなくなりました。気が向くばどこまでも車を走らせ、適当な場所に駐車して車に寄り掛かって空を見ました。あるいは何を何時間も眺めていました。走ることをやめて車移動になったせいで、私の体重はじりじりと

増えていきました。それに伴って女性らしい丸みを帯びてきた尻や胸を見て、母はどう思っていたのでしょうか。

母のお手製の食器たちはほとんど数を増やし、三人家族でどれだけの晩さん会とお茶会を開けば、その食器の全てを使い切ることができるのかわかりませんでした。教室は相変わらず盛況でしたが、人気の転写紙を個人輸入したり、オリジナルデザインの転写紙を発注したり、焼成窯のメンテナンスや電気代で、やればやるほど少しずつ赤字が増えていつているようでした。外では金に細かい父も、なぜか母の教室に関しては口を出すことがなく、母は食費やお小遣いとしてもらったお金を教室の足りない分へまわしているようでした。私たちは三人が三人とも少しずつ違う方向を向いていることに気づきながら、お互いの機嫌を損ねないように「家族」を演じていたのです。

大学時代に、アルバイトで模試の試験監督をしたことがありました。その時会場となった高校で、私は四歳年上の国語教師と知り合いました。彼は黒ぶちの眼鏡をかけ、くるくるの天然パーマを無造作にセットした細身の青年でした。がちりとした体格でいつも赤ら顔の父とは真逆のタイプでした。何より私が気に入ったのはその中性的な印象でした。見た目もさること

ながら、言葉遣いや手の動きまで、男性らしい強引さはまったくなく、まるで風が流れるようにすうっと話し始め、すうっと話し終わり、そして行ってしまふ。そんな彼に惹かれるのに時間ばかりありませんでしたが、その高校を試験場とした模試のバイトに一年間通い、私は彼に交際を申し込みました。まさか自分が誰かに交際を申し込む日がくるなんて。その驚きのほうが強くて、どんな風に彼に気持ちを伝え、それに彼がどう答えたのか今となってはなにも覚えていません。私も人を、それも男の人を好きになることができるんだ。そう知ったのは大学三年の終わり、成人式をとづくにすませたあとでした。

彼、館山透と私は恋人として二年間交際し、その間に私は大学を卒業して市役所で働き始めました。健康保険の点数計算や使用状況を確認する部署に配属され、大学で学んだ英文学は仕事のどこにも役立つことはありませんでした。

「まあ、いいんだよ」彼はそう言いました。

「社会に出て思うことは、学生時代に頑張ったことが全て形になって自分の未来に関わってくるわけじゃないってこと。教師をやってる僕が言うんだから間違いないよ。生徒たちに勉強しろ、勉強しろっていうけどさ、それが将来役に立たないことの方が多くなって自分が一番知っているんだからタチが悪いよな。でも学生時代に無理矢理でも読まされた本や、テスト勉強してい

う理不尽なもの、ドラマみたいに美しくない友人関係、そのどれもがどつかでは人生にとってプラスになることがある。もしくはプラスまでいなくてもマイナスにはならない。それでいいんじゃないかって思う。そう思わなきゃやってられない。」

彼と結婚を意識したのは、そういう彼のいいかげんともいえる大らかさでした。私が働き始めて一年がたった頃、私は両親に彼を紹介しました。母は最近で一番お気に入りだという紐リボンと宝石のデザインされたケーキ皿を彼の前に置きながら

「これ、私が作ったのよ。知ってる？ ポーセラーツっていうの。素敵でしょう」

と自分の話ばかりを彼に振っていました。父は無言でケーキ皿の上のショートケーキをバクバクと口に運んでいたのですが、機嫌が悪いわけではありませんでした。おそらく彼の中で、あまり知らない人とコミュニケーションをとる手段としてはお酒が不可欠だったのです。けれども陽が高いうちに酒を出すのは母が最も嫌うことでした。私たちは居心地の悪い応接間で、ほとんど会話もなくケーキを食べお茶を飲みました。これが母が望んでいたお茶会の姿なのだろうかと思ひながら。

館山がそろそろ、と席を立った時、父はやっと自分を取り戻したように威厳のある声で

「それで、結婚するつもりなのか」

と聞きました。彼は父の目をまっすぐに見て

「そのつもりです。僕はキコさんが好きです」

と言いました。その言葉に父は軽くうなずき、母はおおげさに「まあ」と言いました。

「まあ、素敵ね」

母はそう言って、にこやかにほほ笑んでいましたがそれが心からの言葉なのかどうかはわかりませんでした。恋愛結婚だったのは母も同じだったはず、それも大学進学を諦めてまでの熱烈なものだったはずなのに、私が知る両親にはその欠片かけらもありませんでした。母はこれから始まる私たちの未来に軽く嫉妬しているように見えました。

それから半年ほどして私は館山と結婚し、家を出ました。親と離れて暮らすのは初めてでした。それでもその生活にすんなりと入り込めたのは館山の人柄のなすところが大きかったのだと思います。彼との暮らしは、父や母といった長く一緒にいた家族よりも心地よいものでした。私は実家でも学生生活でも得られなかった、心の底からの平穏な毎日を手に入れたのです。もう長距離走をして自分の体を苦しめて遠い空を見つめることも、何時間も車を走らせて知らない街の知らない海を眺めることもしなくてよくなりました。彼と一緒に暮らすこと自体、海辺のテラスハウスで波の音を聞きながらのんびりと過ごすようなものでした。実際には私たちの

アパートからは海も見えないし、波の音も聞こえず、夜中になれば薄いガラス窓を通して外を走るバイクの集団の、お世辞にも心地よいとはいえない騒音が狭い部屋に鳴り響いていたのですが。

結婚してすぐに、私は妊娠しました。体調の悪さがどこからくるものかわからず、生理の周期も確かには記憶していなかったため、妊娠に気づいたのは結構遅かったと思います。病院に行くと、妊娠検査薬で検査してから来た訳ではないことに驚かれ、さらにはかなり育った胎児の様子に驚かれ、けれどもそれがわざとではないことを理解すると医師は優しく

「これからはきちんと病院に来なさいよ。もう一人の体ではないのだよ。あなたには赤ちゃんに対して責任があるし、自分自身の体ももっと大切にしてあげなければ」

と言いました。私は赤ちゃんがいると聞いた時よりも、その言葉に感動して泣きそうになりました。そうして私もやはり母と同じように自分が一番大事な人間なのだとして愕然としたのです。新しく生まれてくる命よりも、私自身をいたわってくれるような医師の言葉に感動したのですから。

産休がとれるギリギリまで、私は一日も休むことなく仕事を続けることにしました。どこでも皆勤賞だけが私の取り得でした。館山は必要以上に父親ぶることも、私を心配することもな

く、それが逆に居心地のよいものでした。それでもある日50サイズという一番小さなベビー服を何枚も買ってきて嬉しそうに私に見せるので、それは生まれてからごく短い間しか着られないものだとは伝えられず、私も一緒になってまだ見ぬ我が子に想いを馳せました。彼もきっちり喜んでくれているのだ。私も喜ばなければ。そう思いながら、その小さな服の何枚かは封も開けないまま子供は大きくなって着られなくなるのだらうとそんな心配をしていました。

妊娠中も特に問題はなく、私は毎日淡々と仕事をしていました。検診で男の子だとわかった時には、何故だかほっとしたのを覚えています。女の子を産んでしまったら母のように先々を心配するわけではない、進学や就職や恋愛や、そんなものに口うるさく言ってしまうかもしれない。そんな悩みが男の子だと聞いた瞬間にどうでもいいものだと思えたのです。というより、男の子に親がどんな風に干渉するかがわからなかったといった方がいかもしれません。たまに会う館山の両親はいつも元気で、二人で山歩きをして山菜を取るのが趣味でした。その採った山菜をたまに届けにきてくれる以外はほとんど私たちに口出しをしたり、無理に会いに来ようとすることはありません。

「私たちは口も出さないけど、お金も出せないよ」

それが義母の口癖で、そして義父と大きな声で笑うのです。決して学の高そうな人たちではあ

りませんでした。気持ちのよい人たちでした。私も男の子を産んだら、彼女たちのような親になれるのではないか。そんな気がしていました。

あと二カ月もすれば産休に入るとある日、母からの電話がありました。

「お父さん、病気になっちゃった」

まるで言葉足らずの子供のような口調で母はそう言いました。

「病気？ なに、どういうこと」

「癌だつて。胃癌だよ。あれだけお酒飲んだら、ねえ」

他人ごとのような母の言葉づかいは、おそらく大きなショックからなのだろうと容易に推測できました。母は私が思っていた以上に父に依存して生きていたのです。心配なのは父の病状やこれからよりも、万が一未亡人になってしまった場合の自分の生き方なのかもしれない。それでもそれを愛情と呼べないとは、私には言えません。そういう夫婦の形も本人たちが納得していればいいのかもしれない、そう思ったからです。

「どうするの、これから」

私が問うと母は遠い声で

「どうしようねえ」

と言いました。電話口の向こうからは教室に來ている主婦たちの嬌声きょうせいと、森のように植物が生い茂った庭に住みついたカジカガエルの声が混じって聞こえてきました。もうすぐ雨が降るのかもしれない。

それからほどなく、父は検査の為に入院することになり、そしてそこからはゆるいスロープを下っていくように、手術が決まり、その後の放射線治療や抗がん剤治療の日にちが決まっていきました。入院前日まで普通に食事をし、酒を飲んでいた彼は、入院するといきなり食が進まなくなりました。本人は酒がないせいでと言っていました。医師の話では癌は実際相当進行した状態で見つかっており、食事をすることで胃に負担がかかるのを体が拒否している正常な反応だということでした。とはいっても食べられないことは体力が低下していくこと、生きることを放棄することを意味します。口から入れられるものはなんでも、ということでした。家族はヨーグルトやアイスなど、あらゆるものを病院へ運びました。もともと辛党だった父はそれらを喜んで食べることはありませんでした。たまにふと

「酒が飲みたいなあ」

と父が呟くと、母は

「こんなになつてまで、そんなこと言うのねえ」

とあきれたように言いました。父はそれに対して「人間っていうのはそうそう変わらないもんなんだよ」と笑いました。もう父の機嫌だけに気を使う母の姿はなく、二人は病気になる前よりもぐっと距離を縮めたように見えました。そしてその日、実家に母を送っていくと母は玄関先で「あつ」となにかを思いついたように庭に目をやったのです。

「キコちゃん、あなた、庭の奥まで行ける？」

私の腹はもうずいぶん大きくなって歩くのもえっちらおっちらという感じですが、仕事もしているし運転もできます。木々に覆われ小さな森のようになった庭の中に入るとはそんなに難しいことではない気がしました。

「行けると思うけど、なんで？」

母は目を細めて

「奥にみずが生えてると思う。もう何年も食べてはいないけど、毎年出てきてるのは見てるの。お父さん、みずのたたきをご飯にかけて食べるのが好きだったのよねえ、昔から。去年も家の中から、生えてるなつてのは見たのよね。採るのも、作るのも面倒だから見ないふりしたけど」と言いました。

「採ってくる？」

「そうねえ、まだあれば。お父さんがこの家のみずを食べられるのも、もしかしたら今年が最後かもしれない」

母の言葉をおしまいまで聞くことなく、私は車を降りて門をくぐり、庭の中へと入っていきました。雑草は膝の下まで生い茂り、マタニティワンピースをきた私の足をチクチクと刺しました。アーチのように上へ上へと高く伸びた紫陽花の横の暗く湿ったしげみに、みずは確かにありました。その丈は私の腰に届くほどもあり、私は思いきり腰を曲げてその根元に手を伸ばすと、一気に何本かを引きぬきました。思いのほか簡単に取れてきたみずは、ほのかに湿った土の匂いがありました。そこでやつと車から降りてきた母は森の入口で私からそれを受け取ると

「あなたも持っていく？」

と聞きました。私は

「いらぬ。作り方わからないし」

と答えました。すると母は

「もう子供じゃないんだから、そういうのも覚えなないと」

と静かに呟き「明日、作って病院に持ってくわ」と言うのと、そのまま家の中へと入っていきま

した。私は母の後ろ姿を見送り、車のエンジンをかけました。父に中古で買ってもらったこの車は、何年たっても割と好調に走っていましたが、子供が生まれたらチャイルドシートなどを取り付ける関係で、買い換える予定でした。あと少ししか一緒にいられません。

翌日、仕事の帰りに病室へ立ち寄ると、ちょうど早い夕食の時間でした。父はだいぶ前から五分粥におかずは全て刻みという離乳食のようなメニューでしたが、それすらほとんど食べられないようでした。母は家から持ってきた透明な小さいタッパーを開くと中からみずのたきをすくい取り、お粥にそっとのせました。あざやかとはいえない緑色と赤紫の混じったどろっとしたそれを見ると父はめずらしくスプーンを取り、自分の手でお粥を少量口に運びました。ほのかに味噌と土の混じった匂いが私のところまで届いてきます。

「うまい」

父はじつくりと噛みしめるようにそう言いました。

「やっぱり酒が飲みたくなるなあ」

母は「またそんなこと言って」とあきれたように言いましたが、その表情は少し誇らしげでした。父はもうひと匙、みずのたきのお粥を食べましたが、それ以上は喉を通らないようでした。翌々日には手術が控えています。無事に手術が終わり、前のように食べられるようになれ

ばいずれ今日のこと懐かしく思い出すのだろう、私はそう信じていました。

手術は午前中の一番遅い時間からでした。手術室へ看護師に支えられながら歩いて入っていく父の背中、前に見た時よりもさらに丸まったように感じられました。その足取りに力はなく、私も母も励ましの言葉ひとつ思い浮かびませんでした。何年振りかで三人家族で連れだつて歩いているというのに、私たちはひたすら無言でした。

手術が終わるのは夕方になるということで、母は弁当を作ってきていました。病院の待合室には不釣り合いな籐のピクニックバスケットを広げると、そこには母のお手製のサンドイッチが、カラフルな花で彩られた白い珽瑯ほうろうの保存容器に規則正しく並べられて鎮座していました。テーブルの横を通る患者や面会の人たちが、その容器の派手さにさっと目をやり、とある人は「素敵ね」と声をかけていきました。母は満足そうに微笑むと、どこからか自分の教室のチラシを取り出し

「ポーセラーツっていうんですよ。お元気になったらぜひ、覗きにだけでもいらしてくださいね」

と渡していました。母のまわりだけ、花が咲いたようでした。それは世間知らずな母にぴった

りの花たちでした。二切れめのサンドイッチをペットボトルのお茶で流し込んだ頃でしょうか。病棟のいつもの看護師が私たちを探しにやってくる、ナースステーションへと呼びいれました。手術が終わるには早すぎる時間でした。なにかあったのかと硬くなる私と母に、看護師は「大丈夫ですよ。いま医師が来ますから少しお待ちくださいね。お父さんは大丈夫ですから」と言いました。それからすぐに手術着の上に白衣をはおった医師がやってきました。

「どうも、いまさつき開腹したばかりなんですけどね」

軽く息を切らした医師は、私たちの前に椅子を引き寄せて座りました。

「開けてみてわかったんですが、胃のまわりにも広範囲に癌が転移していました。全てを取って検査に出すのは現実的ではありません。事前にわかっていた胃の内部の癌はできるだけ取り除こうと思いますが、まわりはそのまま残して抗がん剤の治療にまかせる形になると思います。いかがでしょうか。治療方針が少し変更になるのでこうしてお話させていただいたわけですが」母はなにも言いませんでした。私は

「広範囲っていうのはどこまでですか？ 目視できる位置にいくつも癌らしきものがあるというのですか？」

と聞きました。医師は

「そうですね。肺の外側や、皮膚の裏側に黒い斑点がいくつも見えます。全てが癌かどうかはわかりませんが、その全てを取り除くことは体にも負担がかかりますし、時間的にもできません。事前にはつきりとわかっていた癌だけを取り除いて、閉めたいと思いますが、その大元の癌を取り除くのもやめるというのも一つの選択です」

「それはどういう……」

「もうその大元を取っても、これだけ転移していると状況がよくなる可能性がだいぶ低くなってしまふからです。であれば、このまま閉じて体力の温存にとめるというのもひとつの考えです。どんな手術でも、体にとっては傷ですから。体力も奪いますし、そこを治そうとして自己免疫力のパワーを使ってしまうと」

そこで初めて母は医師の顔を強く見つめると

「決めてあった手術は予定通りしてください。主人であればそう言うと思います。あの人、予定が狂うことがなにより嫌いだから」

と言いました。そして母の目から涙が一粒こぼれ落ちました。父が病気になってから初めて見る母の姿でした。医師は「わかりました」とうなずくと、備え付けのウォーターサーバーから紙コップ一杯の水を飲み、手術室へと帰っていきました。父の手術は予定より数時間早く終わ

り、病室に戻されたのはまだ日が高いうちでした。目を覚ました父は特にどこかを痛がることもなく、かすれた声で「どれくらい寝てた？」と問いました。母は「そんなに長くないよ」と答えました。それを聞いた父は「失敗か？」と呟きました。母はそれには答えず

「予定より早く終わったのよ。それだけよ」

と優しく言うと、父のタオルケットを直しました。父は小さな声で「そうか」と言うと、また目を閉じました。もう母は泣いてはいませんでした。ただぼうつとした顔で、眠る父の姿を眺めているだけでした。

それから一週間もしないうちに、放射線治療が始まりました。父は自分の足で放射線室まで行き、治療を受けていました。その時が父が入院してから一番元気な時でした。時には足を伸ばして、病院の出口まで私たちを見送りに来てくれたりしました。

「俺も帰りにえなあ」

父はそう言って、私たちの車が見えなくなるまで手を振っていました。そんなことが何週間か続き、そして抗がん剤治療が始まると父はベッドから動くことはなくなり、食事を取ることもほとんどなくなりました。体には点滴のポットが埋め込まれ、胃には胃ろうが繋がれて、

液体の栄養食が直接流し込まれるようになりました。もう酒を飲みたいということもなくなつた父に、母はどんなつもりか

「このチューブからお酒いれてあげましょうか」

と冗談を言いました。父は怪訝な顔をして母を見つめました。それでも以前のようにお互いの顔色をうかがって言いたいことも飲み込んでいたころよりは自然な夫婦の姿で、私はそんな二人の姿が好きでした。

私は本格的に産休に入る時期を迎え、良くないことですができるだけ早く産んでしまいたいと思うようになっていました。父に一度初孫を抱かせてやりたい。間に合わないかもしれない。そう言うと館山は

「気持ちにはわかるよ。でもまずは元気に産んで、自分も元気であることがお父さんにとって一番うれしいことだろう」

と私を諭しました。彼も何度か病院にきて、父が長くなさそうだということに気づいていました。放射線治療で一度はよくなったように見えたところから、坂道を下るスピードは誰から見ても早くなつていたのです。母は多めに採ったみずを塩漬けにしたと話していました。父がまた食べられるようになったら塩抜きして持つてくるのだと。その日が来そうにもないことは、

私にもわかっていました。

予定日の一週間前、父はベッドの横にいる私にめずらしく長々と話し始めました。

「お前の母さんと一緒になって、良かったことばかりじゃなかった。最初はかわいい子だと思っただけど、あの通り気は強いし、社会に出てないから仕事の厳しさも知らない。でも、本当は優しい人だった。俺のためについて料理学校に通って、旬のものを色々料理してくれた。みずを庭に植えたのもあの人なんだ。俺が好きだったからな。でもこの前食べたのはずいぶん久しぶりだったなあ。母さんはもう忘れてるのかと思ってたよ。仕事や付き合いの酒を理由にして彼女の気持ちに応えてこなかったのは俺なんだ。俺も若い頃はもてたからな。毎日お姉ちゃんがいる飲み屋で長々と飲んで朝帰りばかりしてた。母さんは寂しかっただろうな。一緒に旅行に行くことも、同じ趣味を持つこともなくて、気づいたらお互いそれぞれの前の道しか見えなかった。その道は並行はしていても重なってないんだよ。寂しい結婚生活だ。でも、いい趣味が見つかって良かった。金にはならんが楽しそうだよ。俺がいなくなればもつとのびのびやれるだろうな」

父はそこでふうっと大きく息を吐きました。口からは胃に直接流し込まれている液体栄養食の

甘い香りがしました。入院してからはずっとそうなのですが、お酒の匂いのしない父はなんだか不思議で他人のようでした。短い沈黙のあと、父はまた話し始めました。

「一度だけ、たった一度だけ俺は母さんを殴ったことがある。お前が生まれてすぐのことだった。赤子がいるというのに酒を飲んで遅く帰ったことを強く責められて、せっかくの楽しかった気分が台無しになって、イライラした俺は母さんを殴った。それからなんだ。母さんがあんな人形みたいに感情のない顔をするようになったのは。母さんはいつからか俺と急いで結婚したことを後悔していたんだろうな。もっと違う人生があったんじゃないか、そっちの方が幸せだったんじゃないかって。でもきつと誰しもそんな風に思いながら死んでいくんだろうな。癌になって俺はそう思ったね」

「お父さんはお母さんと結婚しなければよかった？ 私なんか生まれなければよかった？」
父は少しびつくりしたように私を見ると

「そういうことじゃない。お前に会えてよかった。でもお前だって俺の娘じゃなければもっと違う幸せな人生を歩んだかもしれない。人はきつとそうやって目の前の幸せを完全に信じることのできない生き物なんじゃないかって思っただけさ。映画の最後までいいに、よかった、いい人生だったって死んでいくことなんか、本当は誰にもできないんじゃないかってさ」

と言いました。それから父は疲れたのか目を瞑つむりました。そうして

「みずのたたき、また食いたかったなあ。きりつと冷やした日本酒とな」

とつぶやき、ほどなく寢息をたて始めました。それから三日後に父は昏睡状態になり、丸二日眠り続けて亡くなりました。私の子供は予定日通りにでてくることはなく、父は最後に初孫を抱くことも叶わず逝ってしまいました。臨月の私は葬式にも火葬にも出席することは許されず、実家でひとり、夫や母といった参列者と父の骨の帰宅を待っていました。秋の風が心地よく庭をさらっていきます。ふと目をやると、蝶々に似た青い花が庭の隅でゆらゆらと揺れています。ずっと忘れていたのですが、私が幼いころ父はよく庭の手入れをしていました。母は花が好きな人でしたが、虫が苦手です。土仕事はしたがりがりませんでした。そんな母のためにと敢えて口には出さなかったけれど、父は休みの日にはよく庭仕事をしていました。その花も父が植えたものだったのでしょうか。ゆらゆらと揺れるその花は、やがて本物の蝶々に変化して空へ高く飛び立っていきました。私の息子が生まれたのは、それから一週間後のことです。ささいなことですが、彼の足の小指は薬指よりもほんの少し長く、その特徴は父と同じでした。

私たち家族は愛情がないわけではなかったけれど、いびつな形の家族でした。でも父が言っ

ていたように、それこそが人間らしい生き方なのかもしれません。けれども私は死ぬ時にいい人生だった幸せだったと息子に伝えて死にたいと思っています。たとえそれが本心でなくとも。

もうすぐこの街には雪が降り、長い長い冬がやってきます。でも必ず冬は終わり、短いながらもしっかりと力強い春がやってくるのです。冬の長さを辛く見つめるより、春の訪れを喜びと共に目を向けられるように、息子には生きていつて欲しいと思っています。いつか出会う大切な人と、どこかでボタンをかけ違えてしまったまま、歩いていくことのないように。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

生きることと、食べること

本当のところ、タイトルにあるみずのたたきを私はあまり好きではありません。父がそれを好きだったかどうかは、もう何年も前に亡くなった彼の思い出を掘りおこしてみても曖昧です。母はポーセラーツのポも知らないでしょうし、私は走るのが大の苦手です。けれども私の実家の庭には確かにみずが植えられていて、目をこらせば蝶々に似た花もあるでしょう。この小説の主人公と私は、近くて遠い背中合わせの鏡のようなものなのです。

物語を書くとき、私は現実と虚構の境目を注意深く歩いて行きます。ですから、どの小説も「私」の話ではありますが、私自身の話ではあ

渡部麻実



表彰式での渡部さん

りません。ただその中で絶対に嘘をつけないのは、登場人物が食べるものと、どうやってそこまで生きてきたかということ。どんな食べ物が好きなのか、悲しい時はなにを食べるのか、楽しい時はなにを？ そういったことを考えながら話を進めていくと、いつの間にか彼らはのびのびと物語の中を生きていくのです。実際の人生もそんなものかもしれません。今日食べたものが、明日の自分を作っていく。毎日がただひたすらその繰り返し。

秋田にはよそで育った人にはまったく想像もつかないような食べものがたくさんあります。ネットで調べてその写真を見たり、食べた人の感想を読んだとしても、その本当の味や匂い、食感まではわかりません。その魅力は実際に手にとって、口に入れたものだけが知る宝物です。幼いころはそんなことを深く考えることもなく、小学校の裏山で姫竹を採って母に味噌汁にしてみもらったり、鬼ごっこの合間にへびいちごやぐみを口に放り込んで喉を潤わせていた私。みずのたたきは好きではありませんが、みずのこぶの醤油漬は大好物です。この故郷の食の記憶はまだまだ私に秋田を題材にした小説をたくさん書かせてくれると思います。その幸せを噛みしめながら、これからも多くの物語を紡いでいきたいと思っています。

第4回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

譲り葉

青山トーゴ・著

譲
り
葉



昨年十二月三十日の夜だった。

「ばあちゃんがやけどしたの、知ってたの？ 父さん」

電話は長男のスマートフォンからだった。大阪に単身赴任中のわたしは、心齋橋の居酒屋で忘年会の生ビールに口を付けたところだった。

長男は東京にある私大の学生だったが、年末年始を過ごすために秋田県の井川町にあるわたしの実家に到着したばかりだった。高校二年生になる長女も一緒だ。長男も長女も、普段はわたしの妻が守っている横浜の家で一緒に暮らしている。

「ほんとに知らないの？ だって……だって、顔じゅう包帯巻かれてんだよ」

長男の声には怒りのようなものが混じっていた。耳元でがさがさと音がして電話の声が変わった。

「昼間な、畑で……ごみ焼いで……やけどした。さつき病院がら戻った」

滑舌が悪いのに、やたら耳に響くその声を聞くのは久しぶりだった。父だ。

わたしはスマホを耳に当てたまま店の外に出た。師走の風が首筋を叩いた。

「なにがあったのや？」

親への問いとは思えない乱暴な声だった。

八十歳にもうすぐ手が届く父は、三十年以上前に脳に腫瘍ができ、長く入院し、退院後も言葉に軽い障害が残った。かつては痩せぎすだったが、体重もかなり増えてしまったらしく、歩くのに杖も欠かせなくなったと母から聞いてはいた。

七年前、わたしの弟がくも膜下出血のため四十歳で急死した。弟には嫁がいて実家で同居していたが、弟の死後は仕事の都合もあり、中学生になる一人娘と近くの公営住宅に移った。わたしは高校を出るとずっと親元を離れているので、父と母は二人きりで暮らすことになった。実家の四町歩の田んぼは土建会社がやっている農業法人に任せざるを得なかった。

ネオンが乱暴に酔客の顔を照らし、嬌声があふれる歩道に立ったまま、わたしはスマホを耳に押し当てた。要領を得ない父の話をもとめるところだった。

七十四歳の母が三十日の昼過ぎ、家のそばにある畑でごみ焼きをした。枯れ草や紙類をいつものドラム缶に放り込んで、たき付けの新聞紙を入れたが燃え方が良くなかった。家の小屋に戻ってポリ缶を持ってきて、くすぶっているごみの上に灯油をまいた。一気に火が燃え上がり、母のビニルヤッケに燃え移った。

必死に両手ではたいたいらしいが、顔までが炎に包まれたのだという。母はとっさに、畑を覆

っていた雪の中に顔を突っ込んだらしい。

だが、顔はしびれるように痛み出し、どんどん熱を持ってきた。それなのに、母は腫れ上がった顔のまま自分で車を運転し、秋田市にある病院まで行ったのだという。本格的な雪道ではなかったとはいえ、一時間はかかったはずだ。

父はとうに車の免許を返納しているし、母も運転していたのだろう、救急車を呼ぶということも、誰かに運転を頼むことも思いつかなかったらしい。病院からの帰りは、父から連絡を受けた母の妹が車で送ってくれ、夕方、ようやく家に戻れたのだという。

そのすぐ後、わたしの長男と長女が横浜から、井川町の実家に着いたのだった。長男によると、母は顔中に包帯を巻かれているのだという。

父は、母に電話を替わると言った。話が聞けるような状態ではないだろうと思ったが、火傷の程度だけは知れたかった。年末の靴音と関西弁のざわつきに苛立ちながら、左の耳を手でふさぎ、スマホを右の耳にぐっと押し当てると、消え入りそうな声が出た。

「わ、わだし、とんでもないこと……してしまった……」

嗚咽はか細く震えていた。

「とにかく行くがら、明日」

「なんも、来なくてもいいがら」

「ばがなごと言うな」

わたしは報道記者をしていたが、いまはデスクだ。大晦日から正月の二日まで休みだった。

一夜明け、わたしは大阪・伊丹空港のターミナルビルのいすで貧乏揺すりを繰り返していた。八時台にわずかに空席が残っていた。飲みたくもないのにビールを買って流し込んだが、動悸が収まらない。

母はいつも笑っている人だった。そして、みんなが認める秋田おばこだった。木村伊兵衛の写真集『秋田』を大阪・天神橋筋商店街の古書店で見つけたのは、一年半前に大阪支社で単身赴任を始めて間もなくだった。笠のひもをあごで結んだ、凜々しい女性が切れ長の澄んだ目でどこかを見つめている。秋田駅にも大きな写真が張り出されている、あの彼女に若いころの母はそっくりだった。

空港リムジンバスを降り、秋田駅からさらに奥羽線に乗り換えた。高校生のところにはできていなかった駅まで、父の知り合いが車で迎えに来てくれるという。二両編成の電車で席を得ると、急に頭が重くなってきた。三時間も前に飲んだビールのせいではないだろう。いつの間にか

窓ガラスに頭を押しつけて、また目をつぶっていた。

秋田駅から奥羽線を北に六駅。真新しい井川さくら駅の駅舎を出ると、横段りの雪だった。車で迎えに来てくれた、もう老人と言っているいい歳をした男性のかつての顔立ちを、わたしはすぐには思い出せなかった。

「よぐ来たな。まんず、たいへんなことだ」

わたしは曖昧に肯くと、車はワイパーをきしませながら走り出した。こんな日に誰も外出していないからか、もともと車も人も少ないからか、真つ白な道路にはタイヤの跡もない。国道沿いにある家電量販店とスズキ自動車の工場が見えてきた。小高い丘にある小学校の黄色い建物を目にしたあたりで息が苦しくなってきた。そこから丘を二つ越えた先で、三十軒ほどの集落の端にある実家に着いた。

「たごいま」

三和土たごいまで呼んでみたものの返事はなかった。

静まりかえっていたのは、本格的に降り始めた雪のせいではなかった。

居間に入ったとき、ひっそりとベッドに横たわっているその人が、あの母だとは思えなかった。歩み寄ると、母は小さく呻き声を上げている。顔中に巻かれた包帯には、小さくくりぬかれた

穴が四つあった。目と鼻と口だった。

石油ストーブの傍らで、父が背中を丸めてうずくまっていた。病院から連れ帰ってくれた叔母も傍らにいてくれた。

わたしは母の毛布の下にそつと手を伸ばした。

指先がわずかに触れ合った。それを母が握り返してきた。弱々しかった。

「いいがら、寝でろ、母さん」

「なんも……大丈夫だがら、わたしは……」すきま風のようにかすれ、ひび割れた声だった。

母は首を動かすこともできずにいた。包帯にくりぬかれた穴の奥で、潤んだまぶたがかすかに瞬いた。包帯は顔だけでなく、首まで覆っていた。

「痛むべ？」

「……なんも」

目の前にある体まで消え入りそうだった。痛くないはずがない。自分かもしそうになったら、泣いて叫んでいるだろう。

「なんも、わざわざ……来てくれなくても……いがったのに」

「ばがなこと、言うな」

わたしは今度はしつかりその手を握り返した。

叔母によれば、やけどはかなりの重症だと医師が言ったらしい。ケロイドは残るから、将来は形成外科手術を受ける必要があるだろうとも。

眠れる薬をのんだというのに、母は鼻を苦しげに鳴らしている。鼻の穴もやけどしているから、呼吸がうまくできないらしいかった。

それでも三十分ほどすると、途切れ途切れの寝息が漏れ始めた。ときおり、鼻をすする。

わたしはそっと居間から出て、サンダル履きで玄関の戸を開けた。横殴りだった雪が上から舞っていた。夕方なのか夜なのか分からない。

翌日の昼過ぎ、電車と新幹線を乗り継いで妻が横浜からやってきた。

隣のスーパーまで母の車を運転して二人で出掛けた。店内に流れる琴のしらべで、元旦だったのだと思い出した。買ったのは母が食べやすそうなレトルトの雑炊、プリン、ゼリー、スポーツドリンク……。車で戻る途中、カーブで後輪が横滑りした。雪道の運転など、山形と長野の支局にいた二十代のころ以来だった。

わたしは三十歳で結婚してから、年に一度ぐらいしか帰省していない。それすらしなかった

年もある。帰省できなかったのではなく、しなかったのだと思う。理由はそれなりにあったかもしれないが、それは後付けの理屈みたいなものだったと思う。

フロントガラスの先には、雪の重みで屋根も柱も傾いたような家がいくつか並んでいる。

いつから、この町はわたしにとって「ほんのたまに帰る場所」になってしまったのだろう。わたしに田舎があったことを思い出させてくれるのは、宅配便で届くあきたこまちの茶色い紙袋と、物故者が出たことを知らせる電話だった。どちらも、父に代わって家を切り盛りしている母が気を利かせてくれた。

赤信号でブレーキを踏むと、交差点には廃屋のようにガラスが割れたガソリンスタンドが雪に埋もれていた。中学生のとき、このスタンドの前を自転車で通学した。白いヘルメットをかぶらされて。

あのころだった、父とのがあったのは……。

ほんやりとした記憶がよみがえってきた。

まだ脳腫瘍を発症していなかった父は、田んぼを作る傍ら、林業公社の仕事で杉山の下枝刈りも請け負っていた。父はローンを組んで四輪駆動のジープを買い、人足を四人乗せて週に何回か山に入った。夕方、臨時雇いの男たちに母がビールと酒、つまみの小鉢を次々に出すのを

わたしは誇らしい気持ちで見ている。

「おい、かかあ」

父は、飯のお代わりも着替えを持ってこさせるのも全部、このひと言で済ませる人だった。今どきの夫のように食器を下げたり、ごみを出したりするような男ではなかった。ただ、酒を飲みすぎるくらいがあった。近所に飲み屋などないから家で飲む。それに飽きると、近所の同輩の家に行ってまた飲む。腰が立たなくなると、迎えに行かされるのがわたしだった。

おぼろげだった記憶の糸が太くなり、ゆっくりとささくれ立ってゆく。

中学二年になると、わたしの体格はもう父に迫っていた。ある雪の夜、いつものように酔っぱらった父をかつぐようにして家に帰り着くと、父は珍しく「酒を出せ」と叫んだ。「もうやめといたら」母がたしなめた。すると父は獣のように四つん這いになって母に迫った。

「飲ませろって言うてるべ」

「父さん、もういいべ。やめろ」わたしはちゃぶ台の横にいた母のまえに体を滑り込ませた。父に突き倒されたわたしの頭が、ちゃぶ台にぶつかって鈍い音を立てた。

「酒だ、出せ」

身をよじって逃れた母がわたしの背中に抱きつくと、父は母の背後に回った。母の体ごしに、

どんという衝撃が伝わってきた。わたしは母の手を振りほどいて立ち上がった。父の上に馬乗りになり、拳をぶつけた。

以来、わたしは父とまともに口をきいたことがない。だから、電話口で母のやけどのことを聞いたときも、最初は誰がしゃべっているのか分からなかった。

がりがりとタイヤが堅雪を踏みつぶす音でわれに返った。

実家に戻り、妻と二人でレジ袋を手に暗い三和土に入ると、誰かが台所に立って食器を洗っていた。わたしの足が止まった。母のはずがない。父だった。

そんな姿を見るのは初めてだった。

茶碗を棚にしまおうとした父のジャージズボンの足元がぐらりとよろめいた。慌ててテーブルに手をついたが、そのまま尻餅をついた。わたしは助けもせず、声も掛けずじっと見ていた。

最初の見舞いからひと月たった一月末。

わたしは一人で帰省した。母は立ち上がって簡単な料理ができるまで回復していた。

まだ二カ月ぐらいは顔中を包帯で覆ったまま、やけどした皮膚の炎症を鎮め、ケロイドの部分は気長に形成外科で何度も治療するしかないのだと母は言う。

昼食に塩鮭をつついていたら、母が冷蔵庫から缶ビールを差し出し出してきた。遠慮していると、包帯をしたままのあごを小さく一度、下に動かした。まだ皮膚が引きつっているからしゃべるのがつらいのだ、と気付いたのは缶ビールの中身が半分ほどに減ってからだった。

いつもより苦いビールをなんとか空にし、わたしにはサイズがかなり小さい父の長靴を履き、スコップを持って玄関を出た。雪はやんでいた。

四、五台が駐車できる玄関脇に倉庫があり、米作りをしなくなったのに、父が「手放したくない」というだけの理由で維持している大型トラクターがしまわれている。

なんとか薄暗くなる前に雪かきを終え、母と父がいる居間で石油ストーブにあたりながら、タオルで顔をふいた。

テレビ台の脇の写真立ての中で、まだ若い弟が笑っている。わたしの長男がまだ小学生だったころ、出戸浜海水浴場でサーフィンを教えてくれたときだ。介護施設で働きながら、両親の代わりに米作りもしていた弟が七年前に急死したのも、今日のように寒い日だった。

あの日、冷え切った葬儀場でわたしは遺影を抱いたまま、天井を仰いだ。

泣こうと思った。泣いてやらなくてはいけないと思った。けれど、ほんとうにつらいときは大声を出して泣くことはないのだと知った。ほんとうに苦しいとき、涙はそっとほおを伝って

ゆく。

涙が乾いたら、また前を見なくてはならず、生きてゆくためには、食欲がなかりうと何かを口にしなければならぬ。ふっと、いい匂いがした。石油ストーブにのせたアルミ鍋でキャベツとベーコンが湯気を上げていた。鼻を近づける。調味料はコンソメらしい。胸いっぱい香りを感じ込んで顔を上げると、石油ストーブのある居間の掃き出しのガラス窓越しに、十坪ほどの庭が見えた。急を聞いて年末に駆け付けたときには、そこに庭があることすら忘れていた。

立ち木は二本。奥の方は柿だろう。痩せた枝から雪が滑って煙のように散った。

手前のほうの株は高さ二メートルほどで全体が丸く剪定されている。すると、雪煙を上げて、株からどさりと白い固まりが落ちた。センリョウに似た、濃い緑をした長楕円形の葉っぱが顔をのぞかせた。葉の根元にあたる柄だけが赤かった。

「なあ、母さん。あれ、なんていう株」

「ユ・ズ・リ・ハ」

母はかすれ声でゆっくりつぶやくと、左右の手で剪定ばさみを動かすようなしぐさをした。

「切り戻し……してもね、すぐに……大きくなって……くるの」

訊いてしまったから、おのれのうかつさにはっとした。まだ痛むのにごめんねと胸の中で頭

を下げ、〈ユズリハ〉をスマートフォンで検索した。

春に枝先にもえぎ色の若葉が出ると、前年の濃い緑の葉が居場所を譲るようにいつせいに落ちるため〈譲り葉〉とも書く。家が、子どもの世代、その次の世代へと続くようお願いを込め、正月飾りで鏡餅の下に敷いたりする。

ユズリハの葉は見る間に横殴りの雪に埋もれてゆく。その株を指差して、今度は父に向かって訊いた。

「なあ、あれ、いつ植えたの？」

聞こえているのかいないのか、掃き出し窓を背にした父は黙り込んでいる。

母も。

うつむいている父の肩の先を見やると、枝にしがみつくように伸びたユズリハの赤い柄と濃い緑の葉が、雪交じりの風を受けて震えている。

と、そのとき、

「早いけど……夕ご飯……したく、するね」

ちゃぶ台に手をつけて母が立ち上がった。

キャベツとベーコンが鍋でくつくつと音を立てている。

わたしは高校を出ると東京の予備校に一年通い、過分な仕送りをもらって私立大学を卒業させてもらった。

だが、就職を決めるときも、結婚するときも両親は一度も注文を付けなかった。

「実家に帰ってこい、秋田で仕事を探してほしい」とも口にしなかった。

そんな父と母である。

ユズリハは、親子草ともいうらしい。

そして五月十三日。

母のやけど以来、わたしは一泊二日で三度目の帰省をした。

包帯は左のまぶたを覆うだけになっていた。茶色い痣もほとんど消えている。母は、わたしの妻から宅配便で届いた洒落たサングラスをかけ、わたしが大阪で買ってきた、高価とは言えないUVカットの帽子をかぶってみせた。

ひとしきり鏡を見て満足したのか、サングラスと帽子を外して愛おしそうにしている。玩具をもらったばかりのこどものようだった。それを傍らで父がじっと見つめていた。

母がやけどをしてから、秋田に住む親戚や近くの人たち、遠くの縁者が評判のいい医師を紹

介してくれたたり、手紙をくれたり、体にいい食べ物を届けてくれたり、さまざまな手を差し伸べてくれた。それは弟が他界したときもそうだった。

怪我や病気はつらい。まして、身内を失うつらさは言うまでもない。

けれど、わたしたちをほかの人間に結びつけてくれるのは、決して喜びや幸福な時間を共にする時だけではないことをわたしは知った。

苦しみを分かち合う時にもまた、人は人と手を握り合う。

その夜の食卓には牛肉のすき焼きが並んだ。父の好物だ。

テーブルの向かい側に父と母が並んでいる。父の髪はいつからか真っ白になっている。心配そうに母を見つめる瞳は澄んだ湖のように穏やかだ。

急を聞いて帰省した去年の大晦日、家では決して自分で何もしようとしなかった父が、台所に立ってスポンジで食器を洗っていたことを思い出していた。

茶碗を食器入れにしまおうとして足元がよろめいて、尻餅をついたあの瞬間、わたしはなにを考えていたのだろうか。

母の代わりに鍋の上で牛肉を広げ、割り下を振りかけながら、何度も同じ場面がよみがえっていた。

その夜、わたしは何十年かぶりに、父の目を正面から見つめて食事をした。

爛酒をお酌して、父と笑い合った。

母も口元だけで微笑んだ。「ああ、ひさしぶりに笑ったわ」小さな声で言うと、そっと口元を指先で押さえた。そうだ。母はいつも、そうやって笑っていた。

二日酔いで迎えた翌日、わたしは冷たい水の入ったコップを手に居間に立った。

大阪に戻る前に、もう一度ゆっくりあの庭を見たかった。

ユズリハの丸い株に、母の日のまばゆい朝日が降り注いでいた。

もえぎ色の若葉と濃い緑の旧葉が、重なり合うようにして輝いていた。

随筆・紀行文の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

秋田に風を

青山トーゴ

このたびの賞をいただいてから、私のまわりに風が吹いているのを感じています。

それは、十八歳までを過ごした雪解けの秋田の田園を渡る澄んだ風のようにもあり、男鹿半島に入道雲を連れてくる夏の風のようにもあります。けれど、そうした風の最初は、まぎれもなく選考委員の一人である内館牧子先生がまよっておられた風でした。

先生の脚本や小説の秀逸さは言わずもがなですが、個人的には以前から、エッセー集『きょうもいい塩梅』に収められている『シユウマイ』という一作に胸を打たれておりました。まだ駆け出しだったこ



表彰式での青山さん

る、ラジオの一時番組の脚本を仕上げたため、歯を食いしばりながら、この世に（自分だけの旗）を立てようともがいているひとりの女性の息づかい、ペンを握る指先ににじむ汗のぬめりまで感じ取ることができました。拝読した当時、小説の世界に足を踏み入れたばかりの私と何かが重なって見えたのだろう、と勝手に思い込んでおります。

その内館先生が、表彰式会場から出発が迫った慌ただしいさなか、私の手を握ってください、
「あなたは小説が書ける人です。ぜひともお書きなさい」と背中を押してくださいました。柔らかな手の温もりと、周囲の人たちを丸ごと包み込んでしまう笑みを今も思い出しております。

長く報道記者をしておりますが、今は単身赴任先の大阪で、直木賞、芥川賞作家らを輩出する大阪文学学校にも通い、長編小説の構想を練っております。微力ではありましようが、停滞気味の我がふるさとにささやかな風を起こし、そこに暮らす人々の背中をそっと押してあげられるような作品にしたいと考えております。物語の主人公は秋田の高校生たちです。

なお、表彰式で公言してしまつたとおり、次回のふるさと秋田文学賞の小説部門にも応募させていただきます。やるからには最高賞を狙わせていただきます。勇み足や腰砕けにならぬよう、日々の文章修業に精進する所存です。決して、つき膝などはいたしません。

第4回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

「生きる」 父の愛した映画

鹿住敏子・著

「生きる」 父の愛した映画



「最後に、ひとりでブランコに乗っているシーンがいいんだあ」

晩酌をしながら、父がしみじみとその映画の話をしてくれたのは、私がまだ大学生だった二十歳の頃だろうか？

黒澤明監督の「生きる」という映画だ。

今のようにビデオのレンタルとかもない時代に、映画館に足を運んで観た映画の中でも、一番心に残っている作品だそうだ。

「いつか観てみよう」

心のどこかにそんな思いがありながらも、白黒の古い映画を、わざわざ借りてきて観たいというほどの気持にもならず、いつの間にか忘れていた。

あれから四十年の歳月が流れ、なぜか、今頃になって父の話を思い出し、「生きる」のDVDを観た。

最初は夕食のかた付けをしながら観ていたが、見慣れていない白黒で正方形の画面と、聞きとりにくい音声で、ほとんど理解できなかった。

「この映画は、これだけに集中して観ないと理解できないな」

と思いなおし、日を改めて、時間も気持も余裕がある日に、画面だけに集中してもう一度観た。

見にくいと思っていた白黒の映像も、映画に惹きこまれるほどに気にならなくなり、むしろ、深い味わいあるものとなった。

少し猫背で、手酌でお酒をそそぐ主人公の姿は、生前の父の姿と重なった。

相手の話を丁寧にきいてから、ひとこと、ふたこと、うつむき加減に、ぼそぼそとも聞こえる静かな話し方もまた、父を偲ばせる。

秋田の母から、父の異変を伝える電話がきたのは、父が六十歳の還暦を迎えたばかりの頃だ。

二人の息子達の結婚式も、東京と京都でそれぞれに無事に済み、肩の荷をおろしたであろう時だった。

長男の結婚式から一年も経っていない次男の結婚式の時には、

「ずいぶん痩せたね」

と、出席してくれた親戚のみんなにも言われていたが、

「運動と食事でがんばったんだ」

なんて応えながら、糖尿病だった本人は、むしろ痩せたことを喜んでいた。

母からの電話は、それから間もなくのことだ。

「かかりつけのY先生のとこで血液検査をしたら、『ヘモグロビンの数字が七、六まで下がっています。これは、体のどこかで大出血をおこしている可能性があります。紹介状を書きますので、できるだけ早く大きな病院に行ってください』と言われた。それなのに、いくらすすめても病院へ行こうとしない」

という、困り果てた母の声。

「わかった。できるだけ早く秋田まで行くから心配しないで」

と、母を少しだけでも安心させて、電話を切る。

私の息子は、四歳の時に、小児がんの一つである脳腫瘍を発症しており、手術、抗がん剤、放射線とすべての治療を終えて、闘病生活三年目にはいったところだった。

手術の時には、父も母も秋田から埼玉までかけつけてくれた。母からの電話をもらった時は、幸い息子の状態は落ち着いていたので、今度は私が父や母の力になる番だ。

秋田の小さな村にある実家から、秋田市内の病院に連れて行くには、まず、車が必要だ。

息子に乗せて、主人と交代で運転しながら、自宅のある埼玉から秋田に向かう。長旅になるが、息子の手術の後は、救急車代わりにもなるように、大きなワンボックスカーに買い替えていたので、息子にも無理なく行くことができた。

実家は、秋田自動車道が開通してからは、インターから十分という利便性のよいところにあり、八時間ほどで着いた。

母は、私の顔を見て安心したようで、泣き出しそうな顔をしていた。父はだれが見ても心配するくらい、急激に痩せていた。

その夜、みんなが寝静まり、父と二人きりになった時に、父の話を聞いた。

「なんで病院に行きたくないの？」

と、何気ないふうに訊くと、

「自分は今もう、だいぶ前から、ひどい下血がある。本で調べたら、たぶん大腸がんだと思う。それもかなり進行してしまっている気がする」

それを、医師からはつきり宣告されるのが怖くて、病院には行きたくないのだそうだ。

それから父は、自分の下着を見てほしいといつて、見せてくれた。

想像以上の下血で、下着は真っ黒だった。

痔とかそういうものではない出血であろうことは、素人目にも明らかだった。

この大量の出血を目にしながら、病院へ行く勇氣もなく、毎日を、どんなに不安な思いで過ごしていたのだろう。そして、それを洗濯する母もどんなにか心配だっただろう。

身長が百八センチ近くもあり、三十年以上、小学校の教師を勤め上げ、どんな時も動じずに堂々としていた父。

その父が、心身ともに、これほど弱ってしまっている。

その時、私は三十三歳という若さだったが、息子の小児がんの闘病の三年間で、いろんな経験をしてきた。

特に、発病からの一年くらいは、常に「息子が死んでしまうのではないか」という思いが頭から離れず、私自身が精神を病んでしまいそうだった。

そんな中で、懸命にがんばっている息子とともに、ひとつひとつ乗り越えてきた三年間で、

少しずつ、強くなっていた。

父にとっては初孫である、まだ七歳になったばかりの息子が、十四時間にもおよんだ脳腫瘍の手術を乗り越え、右半身の麻痺という大きな後遺症にも負けずに、懸命に生きている姿が、なによりも勇気を与えてくれたようだ。

「雄樹もがんばっているんだから、俺もがんばる。明日は病院に行く」と心を決めてくれた。

病院へ行く日の朝。

早く起きて、家の周りを散歩していた父が、いざ、病院へ行く時間になると、靴を履いて玄関に腰かけたまま、立ち上がろうとしない。

しばらくの間、だまって見守っていたが、あまりにも長い時間そうしているので、「どうしたの？」

と声をかけてみる。

「今日、病院に行ったら、そのまま、もう、家には帰って来られない気がして」と、父の不安そうなことば。

それは、息子の入院のたびに、私自身が感じていた思いだったので、父の、押しつぶされてしまいたいようなだろう胸の内は理解できた。

「わかった。今日はどんな結果がでて、そのまま入院にはならないように、私が病院の先生に頼んで、必ず、家に帰って来られるようにするから」

きっぱりと言うと、父もやっと安心したように立ち上がる。

母には、息子をみてもらって家で留守番をしてもらい、父と二人でむかう。

秋田市内の総合病院に着く。受付で、いろいろな書類を書いたりする手続きになると、几帳面でそういう事務的なことが得意な父は、スムーズに進めていく。

血液検査、レントゲン検査、エコー検査と続く。

一通りの検査が終わった後、私一人だけが呼ばれる。

「これは、厳しい状況だろうな」

という覚悟をして診察室に入る。

「ご家族はお一人ですか？」

と、医師の最初のことばで、検査の結果が厳しいのだろうと予測がつく。

「はい、今日、付き添ってきたのは私ひとりだけです。私の息子は小児がんの脳腫瘍で、三年前から闘病しております。父の検査の結果が、どんな状況でも、落ち着いてうかがうことができると思いますので、お話しください」

と、伝えると、先生の方も深くうなずいて、病状を説明してください。

白いボードに張り付けた画像を見ながら、

「この、白く映っている部分が大腸がんです。肝臓にも、二か所転移がみられます。今の状態では、あと、半年くらいでしょう」

覚悟はしていたものの、それを超えてしまうような重い結果だった。

現在では、治療効果もあり、「癌、イコール死」ではなくなりつつあり、本人への告知も当たり前になってきた。しかし、二十年以上前は、そうではなかった。ましてや、肝臓にまで転移してしまった状態では、余命も限られてしまう。

さすがに、涙がこぼれそうになりながらも、先生にたずねた。

「なんとか治療していただける方法がありますか？」

「大腸の方は、手術で切ってしまうえば大丈夫だと思います。ただ、肝臓の方は手術はできませ

ん。直接、抗がん剤を注入して治療しても、延命にしかならないと思います」

「わかりました。父はまだ、六十歳になったばかりです。母や弟たちにも相談して、延命の治療をしていただくことになると思います。ただ、父は、今朝、病院に来る時も、病気に對する不安がとて強く、やっと、説得して連れてまいりました。検査の結果をそのまま伝えることは、やめた方がよい気がいたします。先生のお考えはいかがでしょうか？」

と、たずねると、まだ、三、四十代の若さながらも、落ち着いた物腰の先生は、静かに話してくださいました。

「私も、そう思います。肝臓への転移があるので、手術や抗がん剤の治療をしても、余命は二年くらいだと思います。そこまでのことは告げずに、手術や治療ができるように、私の方からも、本人にお話ししましょう」

「よろしく願います。もう一つお願いがあります。今日はどんな結果が出て、そのまま入院はせずに、必ず家に帰れるように、先生にお願いするからと言って、病院に連れてまいりました。予断を許さない状況であることは承知の上で、このまま入院ではなく、今日は自宅に帰らせてください。病院で指定してくださる日には、必ず、入院の準備をしておきますから」

先生もわかってくださり、その日は、父との約束通り家に帰る。

とにかく家に帰ることができて安心したのか、父は、病院へ行く前よりも、むしろ、元気にさえみえた。

そして、数日後、手術や治療をうけるために入院した。

本来の几帳面で真面目な性格が、入院生活ではとても役に立ち、治療は順調に進んだ。

前年に結婚したばかりの、二人のかわいなお嫁さんたちも、横浜や京都から弟達と一緒に、代わる代わるお見舞いに来てくれて、病室が明るくなり、父も母も嬉しそうだった。

子供の頃に、父に連れて行ってもらった秋田の竿灯祭りも、病室の窓からみた。

手術と同時に、肝臓への直接の抗がん剤治療もおわり、一時的にはあるが、状態は随分回復して、自宅に帰ることができた。

その後も、父が自分の本当の病状を訊いてくることはなかったのです、癌であることも余命が限られていることも告げずに、最後の二年近くを過ごした。

それで、よかったと思っていた。この映画を観るまでは。

映画の中の、市役所の職員である主人公も、胃がんの告知はされなかったが、自分の余命が残り少ないだろうことは感じていた。いつときは氣力を失くして、自分を見失いそうになってしまうものの、限られた命だからその、使命ともいえるべき希望をみつける。

以前から市民に懇願されていた「児童公園をつくる」という大きな目標だ。病気になる前は、ただ、与えられた書類に印鑑を押ししたり、生きがいとは程遠い仕事を黙々とこなしていた。しかし、そこからは、人が変わったように、粘り強く精力的に実現に向けてがんばった。

この主人公をみているときに、初めて、父に真実を伝えなかつたことが、本当にそれでよかったのか、後悔に近い思いが胸に広がった。

まだ、六十歳という若さだったからこそ、やり遂げたい、父なりのちがつた時間の過ごし方があつたのではないだろうか？

それでも、「死」を常に意識した毎日が、どれだけ苦しいものかを、息子の病気で否応なく体験していた私には、父や母にその苦しみを味わわせることができなかつた。

秋田から遠く離れた場所で暮らし、父や母と同居できない弟達も同じ思いだった。

そんな弟達の生き方も、

「家に縛られることはないから、自分の生きたいように生きていきなさい」

という、三人の子供たちに送ってくれた父のことばのおかげなのだが。

一日でも長生きしたかったのである。父は、大好きだったお酒もぴったりとやめ、好きな魚釣りと読書と音楽を聴きながら、発病前と同じような、ゆつくりと穏やかな毎日を過ごしていた。

しかし、一年半後に、まちがいなくその時はきた。

何度目かの入院となり、新幹線で埼玉から秋田まで行き、そのまま市内の病院へ向かう。

ベッドに横になってる父は、あきらかにこれまでの入院の時とは様子がちがう。

腹水がたまり、寝返りさえ打てなくなっていて、見るからに苦しそうだ。それでも、私の顔を見ると嬉しそうしてくれる。

部屋も、相部屋から個室になっている。

ずっと付き添っていた母に休んでもらい、私と二人きりになると、父がしみじみといった。

「家に帰りたいなあ。二階の書斎で、酒つこを呑みたいなあ」

病気になってからは、ずっとお酒を断っていた父のことばに、もう、自分の死を覚悟しているんだなあと確信した。何とか、かなえてあげられないかと、先生に頼んでみようかなという思いが頭をよぎる。

しかし、口からの食事も摂ることができない、今の父の状態では、点滴をはずしてしまったり、たちまち脱水してしまうだろう。そんな無謀なことを、主治医の先生が許可して下さるはずもない。自宅で、小児がんの息子を看病している経験から、瞬時に冷静に判断ができてしまう自分がいる。

映画の主人公が、最期に、できあがった公園のブランコに乗って、幸せそうな顔で亡くなった場面を見たときに、思い出したのは、あの日の父のことばだ。父にとつて、最期をむかえた公園のブランコは、家の二階の書斎だったのだろう。それも、かなえてあげられなかった。

それなのに、父は、埼玉で闘病している孫のことを心配してくれて、
「もう、大丈夫だから、雄樹のところに帰ってやれ」

と言ってくれる。

後ろ髪を引かれる思いで、入り口で振り返ると、私の姿をまぶたに焼き付けるかのように、じっと見つめている。そして、苦しいだろう息の中で、

「ありがとう」

と、ひとことだけ、万感の思いを込めたように言ってくれた。

それが、父との最期だ。

私は「ありがとう」さえ言えなかったままだ。

父の最期のことばは、見送った側の悔いや心残りを、優しく包み込んでくれている。それは、どんなに時が経っても変わらない。

あの時の父と同じ年齢になり、幼い頃から父親っ子だった私は、なんて多くの大切なことを、父から教えてもらったのだろうか、今さらながらに気が付く。

そして、自分が、父によく似ていることも。

長い闘病の中で、がんばって生き抜いてきてくれた息子も、昨年亡くなった。行年三十二歳、父の命日の三日前だった。

深い悲しみの中にいるときに、なぜか、父が好きだと言っていた「生きる」という映画を思い出した。

父も息子も、私の中では生き続けている。

父も息子もかなわなかった、ここから先の「生きる」を、大切に生きていく。

「生きる」 父の愛した映画

父の大きなあぐらの中で

十八歳で秋田を離れ、一人暮らしを始める時に、家族のアルバムから、二枚の写真を抜いていきました。それを木のフレームの写真立てに入れて、いつも部屋に飾っていました。

その一枚は、ステテコ姿の大きな父のあぐらの中で、まだ、二、三歳であろう私が絵本を読んでもらっている写真です。白黒の写真からでも、幼い私と父の会話が聞こえてきそうな、とても優しい写真です。数ある写真の中から、その写真を選んだ時の自分の心は思い出せませんが、今でも、その写真は大好きです。

本屋さんもない小さな村でしたが、毎月、父は勤務先の小学校から

鹿住敏子



表彰式での鹿住さん

の帰りに、小学館の月刊誌を、子供達三人に買ってきてくれました。日光写真とか、楽しい付録のたくさん付いた「小学〇年生」は、毎月、待ちどおしかったのを思い出します。世界名作文学全集も少しずつ届き、いつの間にか五十巻が、それ専用につった棚いっぱいになり並んでいました。

そんな風にして、文字や本に親しませてもらえたことが、今日までの私の大きな支えになっています。

長男が四歳で、小児がんの一つである脳腫瘍を発症しました。それからの三十年におよぶ闘病の年月は、ことばでは言い尽くせない毎日でした。ただただ、長男のそばに寄り添って生きる日々の中で、本を読むことは、大きな慰めであり、糧でもありました。長男もまた、不自由になってしまった体の中でも、本が大好きでした。

そして、いつの頃からか、書くこともまた、自分の心を深く掘り起こしてくれるものとなりました。このような自分の原点は、父の大きなあぐらの中で、はじけそうな笑顔で絵本を読んでもらっていた、あの日の私なのだと思います。

選 評





ふるさと

内館 牧子

「小説の部」の選考はかなりもめた。

三人の選考委員の評点を合計すると、「秋田駅『待合ラウンジ』」、「ヘミングウェイに聞いてみて」、「オータムライスフィールドの猫たち」、「みずのたたき、てふてふの花」がほぼ横一列という状況だった。

「蘭画日記帖」は面白く一気に読めるのだがやや強引であることと、取材の欠陥が目立った。「犬はエライ!と心底思う。」は、やや魅力に欠け、この作品は最終選考まで残ったものの、受賞の対象には成り得なかった。

ほぼ横一列の四作品については、私個人は「秋田駅『待合ラウンジ』」が面白いと思った。だが、多くの人が陥る失敗に、この作品も陥っている。

秋田の名所案内になっっていることである。秋田駅のラウンジに座り続ける謎の男というサスペンスにより、巧みに引っ張って行こうとするも、市内観光が入って興ざめさせられた。「ふるさと秋田文学賞」となると、どうしても名所を織り込まねばと考える人が多いようであるが、題材として秋田を関係させることと、名所案内はまったく別物である。名所が出てくることは構わない。ただ、小説という虚構をぶち壊す出し方をする人が多すぎる。

「オータムライスワールドの猫たち」は宮沢賢治をどこかで意識した作品で、面白く書けているが、劇中劇のような挿入話が三つはあきる。

「みずのたたき、てふてふの花」は万遍なく点を取った。淡々と書いているが心理描写がうまい。「どんくさい娘」がまるで「ダンゴ虫の父親」を愛している心理が、何ということのない一行によく出ている。この作品は「ヘミングウェイに聞いてみて」と最後まで争った。

その「ヘミングウェイに聞いてみて」だが、万遍なく点を取った「みずのたたき、てふてふの花」と違い、選考委員の評点がくつきり分かれた。主人公の「私」はかなり面倒くさい女である。そのキャラクターを納得させるように書いているか、否か。それがポイントのひとつだったと思う。低い点をつけた選考委員も、主人公のキャラクターに納得はできないものの、こ

の作品が放つ香りは、その面倒くさい主人公が醸すものだと十分に承知していた。私がうまいと思ったのは、風景描写と心理描写が巧みからんでいることである。秋田名所の抱返り溪谷が名所案内どころか、登場人物の心理を浮き彫りにしている。

作品の長所短所と魅力を再検討し、「ヘミングウェイに聞いてみて」を文学賞に、「みずのたたき、てふてふの花」を佳作に決定した。

「随筆・紀行文の部」の文学賞は、すぐに「譲り葉」に決まった。万遍なく高得点を集め、構成もセリフも心理描写も、他より抜きん出ていた。秋田弁の会話が非常によく効いていて火傷をした母親の思いやかけつけた息子の思いなど、この哀しみと愛おしさは標準語では出し得ないだろう。筆者は通信社の報道記者だというが、さすがの一篇である。

佳作は「『生きる』父の愛した映画」で、これもすんなりと決まった。長男を亡くした悲しみの中で見た映画「生きる」。黒澤明の作品で、闘病の末に亡くなった父親が愛した映画だった。著者は子供を失うという深い深い悲しみを、黒澤映画と父親を重ね、抑制の効いた文章で書き上げた。切ないのに温かい随筆である。

最終選考に残った「白井晟一と秋田の建築」は随筆としては評価しにくい、白井を愛する

思いが、秋田は幸せな県だと思わせる。

「思い出巡り―尾去沢」も観光案内的な失敗に陥っている。加えて思い出話の羅列のため、あきる。第三者が読むことを念頭に書くと、かなり違ったと思う。

「北緯4度をぶっ飛ばせ」は、面白い題材を生かしてきれていない。途中に挟んだ歴史を含め、構成を練ったならもっと刺激的で劇的な随筆になったはずである。

小説も随筆・紀行文も年を追うごとに読みごたえある作品が増えており、この文学賞が確実に根を張って来たことをとても嬉しく思う。

〈脚本家 秋田市出身〉



小説やエッセイを書くとき

塩野米松

今回の応募者数は106人。60歳代の34人をピークにほぼ正規分布のグラフになっていました。人生の何たるかを知り、両親の死や、挫折、残りの時間を感じるようになって自分のことを含め作品にしてみようと思う人が多いのでしょうか。

小説・随筆紀行両部門で最終に残った4点は、60歳、53歳、42歳そして31歳でした。テーマも肉親や息子の死や疾病をテーマにしたものが3点、失恋からの自分探しが1点。これらの作品を読みながら、自らを作品に投影させながら、これまでの生き方を作品作りによって振り返って、足下を確認しようとしているのだと思います。背負った心の傷を、作品を紡ぐことで昇華させ、明日への出発点を模索しているのかもしれない。

文学には生き方や商売に役に立つような即効性はないと思いますが、傷ついた心を癒そうと

思ったときには、文字にして、一度問題を自分の外側に立たせることが心を整理する上で大事なのだと思います。

小説部門のふるさと秋田文学賞受賞の『ヘミングウェイに聞いてみて』（夢野寧子さん）は、抱返り溪谷を、ヘミングウェイの短編小説『二つの心臓の大きな川』と重ね合わせて、自己を喪失しそうな私の心境を描いたものです。29枚の小編ですが、かつて恋人が残した言葉を手がかりに見事な作品に仕上げています。

抱返り溪谷の川とヘミングウェイの作品の川とは、とても似てるとは思えないのですが、それを言ったのは学生時代の片思いの人。作者ではないのです。あの溪谷で遊び、ヘミングウェイを愛読してきた選者の私は、「どうしてここが」と思いながら読みましたが、そう思わせながらも読ませる力業と描写、タイトルのアイデアには感心しました。

佳作の『みずのたたき、てふてふの花』（渡部麻実さん）は、現代日本の家族のある姿を描いたものです。50枚という枚数の中で、複雑な家族構成や登場者の性格、時代の流れの中での生活の変遷を描ききるのは難しいものがあります。祖父母の代から主人公の私まで三代。焼け跡の市から現代まで。家系図と年表を作りながら読みました。読み手に疑問を持たせるのはさ

けたいものです。象徴的な部分を選び出し、そこに言いたいことを映し出す工夫が必要でしょう。書く意志と作品作りへの執着には拍手です。

随筆・紀行文部門のふるさと秋田文学賞は『譲り葉』（青山トゴさん）。故郷を遠ざかっていた私が帰るきっかけとなったのは、母の大火傷。それをきっかけに故郷に帰るようになった私は庭に植えられていた譲り葉に気づく。父とのしがらみが癒されていく心の変化がうまく描かれている。希望を言えば、一点でいいので展開の中で心を緩ませる情景やつい微笑んでしまう場面を挟み込んでみたらいかがでしょうか。読み心地のいい作品になります。出来事を正確に描写する力は申し分ないので、そうした工夫が随筆の艶になることをおぼえてください。

佳作は『「生きる」父の愛した映画』（鹿住敏子さん）。息子を癌でなくした私は、かつて父が薦めてくれた黒澤明の映画『生きる』を見た。その父に異変が。肉親の死が続く中で、黒澤映画が与えてくれたものは。過酷な状況のなかで生きる意味を探った佳品。

いずれの作品からも書くことの楽しさを感じました。これからも書き続けてくださることを望みます。文章も訓練が大切です。事象を拾うアンテナ、観察力、そして自分の文体。これがさ

らなる良作を生みます。この賞が書くことのきっかけになってくれれば幸いです。がんばって
ください。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉



凄味ある表現力の激突

西木 正明

文学賞選考の現場では、受賞作を選出するという任務があったので、いずれの候補作にもかなり厳しいことを申し上げた。

しかし今、選評を書くためにあらためて受賞作に目を通して、例年以上のレベルの高さを確認出来、選考に携わった者のひとりとして嬉しく思っている。

とりわけ小説の部受賞作は、佳作共々文学賞立ち上げからわずか四回目に出会えたとは思えぬ、ハイレベルな作品だ。

受賞作となった『ヘミングウェイに聞いてみて』は、当初その枚数の少なさから、大丈夫なのかと危惧しながら読んだ。

小説は短いほど難しい。この箴言しんげんは今も昔も変わらない。とりわけ四百字づめ原稿用紙換算

で、三十枚という紙幅は職業作家泣かせの枚数とも言われている。なのに『ヘミングウェイに聞いてみて』は、あろうことか二十九枚だ。

読みはじめて少し戸惑った。しかし、リズムミカルな読みやすい文章に乗せられて読了した時は、戸惑いが、なにこれという感嘆に変わっていた。

プロットは、一言でいえば、「一瞬の愛の長い後遺症」という戯れ言で説明出来る。しかし随所に見られる才気あふれる表現力が、読む者を最後まで引つ張って行く。

選考の段階で、筆者を最後まで悩ませたのが、佳作となった『みずのたたき、てふてふの花』である。

受賞作とは対照的に、短編の王道ともいえる五十枚前後（本作は四十九枚）の紙幅。プロットもありふれた人生を淡々と描いた私小説。言い方を変えれば「自虐的私小説」である。

しかも冒頭の数ページは、まるで改行なしで一人称の地の文。まいったと思いつつ、気がつくときと読了していた。

先に受賞作と対照的と書いたのは、このあたりを指してのことだが、実はすばらしい共通点もある。それは、普通なら途中で読むことをやめてしまうような、一人称で改行なしの地の

文を、気がつくとき読み終えていたと読者に思わせる、リズムカルにして表現力豊かな文章である。

登場人物は、いずれも個性的な祖父母と父母。それを描く「わたし」は、徹底的に没個性的な存在に徹している。

これも並のアマチュアが出来ることではない。

こうした力業に溢れた作品で、しかもプロットはまるで逆。しかしそこかしこに出現する、凄味のある表現力は二作に共通する。

出来ることなら、この二作に授賞したかったが、この手の文学賞としては、やはりきちんと受賞作と佳作を提示したほうがいいと思いなおし、今一度読みなおした。

そして僅かな差を見つけた。それは題名、そしてタブーともいえる紙幅に果敢に挑戦した、独創性である。

よく題名も作品のうちと言われるが、この度はまさにそれだった。候補作を読んで、こういう悩みに遭遇することはほとんどない。そういう楽しみを与えてくれた夢野寧子、渡部麻実両作家には、ますますの健筆を祈ってやまない。

スリリングだった小説の部とは対照的に、随筆・紀行文の部は、ある意味おだやかだった。文学賞作品と佳作は、共に家族への関わりと思いをテーマにした作品である。

受賞作となった『譲り葉』は、随筆であると同時に、紀行文としても良く出来ている。父親を中心に、いい意味でありきたりの人生を、あたかも短編小説のような構成で書き上げている。読後感の良さが、この作品の特徴である。

佳作の『「生きる」父の愛した映画』は、いまだ私たちの中の心に生きている、秋田が生んだ世界的巨匠黒澤明の晩年の作品、「生きる」を下敷きにして、ストーリーを展開している。これも随筆というより、良質の掌編小説ともいえる作品だ。

〈作家 仙北市（旧西木村）出身〉

特別寄稿

文体を愉しむ

柴山芳隆

小説の読み方や愉しみ方に特別の方法やパターンがあるわけではない。小説の書き方や作りに一定の基準ないし規則が存在しないのだから、それは当然でもある。書き手は何をどのように書き表しても構わないし、読み手は、どんな作品にどのような感想を抱こうとそれはまったく個人の自由なのである。

それでも、小説の読み方、愉しみ方に幾つかの観点が存在することを頭から全否定する必要はないであろう。時には、示唆に富む指摘に遭遇して読みが深まる場合も無しとはしないからである。

言語は、読み手や聞き手の心に訴えてくる際、二面の働きをしている。一つは、主として受け手の理性に向かって、その言葉のもつ意味を伝えるものであり、他の一つは、主として受け手の感性に向かって、その言葉の響きを通じて漠然とした感触を伝えるものである。すなわち、読み手や聞き手は言葉から、意識的にはその指し示す意味を受け取り、無意識的にはそれぞれ

の言葉がもつ雰囲気を受け取ることになる。言語がこの二面的な訴え、つまり、理知的と感覺的の働きかけをなすにあたり、二重な、個別的な作用をせず、単一な、分離不可分な効果を対象者の心に伝えるように融和しているのが一般的に文体ないしスタイルと呼ばれているものである。

最近は署名入りの記事も多くなった新聞の文章は、基本的には事件や事象の外側の部分を正確に読者に伝えるのが目的だから、小説やエッセイなど、修辞学と文章心理学を両輪とする文学的文章の文体とは質が異なる。もちろん、新聞にもそれなりの文体はあるが、それはあくまで「新聞の文体」と呼ぶべきものであろう。新聞は、社会的な公器という機能を逸脱することが許されないのである。

これに比し文学作品の文体は、自由な心をもった人間が、純真な感情や誠実な心情がとらえたものを磨き抜かれた言葉にして表すことよって生まれたもので、個性や獨自性がその背景にはある。その辺の事情を英文学者で評論家でもあつた厨川白村は『象牙の塔を出て』の中で、「エッセイにとって何よりも大切な要件は筆者が自分の個人的人格的色彩を濃厚にだすことである」と述べ、「筆者その人のおもかげが浮き出して居なくては面白くない」と言い替えている。

エッセイにも小説にもさまざまなスタイルの文章がある。技巧の限りを尽くした絢爛たる文章、^{じゆうじょう}嫵嫵と余韻を漂わせる抒情豊かな文章、地味ながら思わず歎息を洩らさずにはいられない巧みな文章、ふるえる哀切な心情をきめ細かにつむぎ出していく文章、吹かれるままに飄飄^{ひょうひょう}と流れるこだわりのない文章、一切の技巧を排除した一見稚拙で真っ直ぐな文章等々。文章にも姿があり、声があり、表情があり、性格があるのである。どの作家がどういう文体の持ち主であるかを探ってみるのは、読書の大きな魅力の一つと言つてよいであろう。

また、同じ一人の作家でも、若い頃と晩年では大きく変化している場合も少なくない。浪漫性豊かな森鷗外の初期の名作『舞姫』から後年の史伝体の傑作を想像するのはほとんど不可能である。

亀井勝一郎が『読書論』の中で、文体の喪失は現代文学の顕著な特質である旨を述べ、文学を専門とする学者や研究者の間では、文体論は文学研究のなかでもっとも遅れた分野であると指摘されたりもしている。しかし、そうした状況は文体をめぐる問題がもはや何の興味も関心も呼ばなくなつたということではない。

同じノーベル文学賞の受賞者でも、川端康成と大江健三郎の文体はかなり異質のものである。今年同賞を受けた日系イギリス人のカズオ・イシグロと深い親交があるという村上春樹が今後

ノーベル賞を授与されるかどうか定かではないが、村上の文体が川端や大江のそれとはまた違った魅力を備えているのは瞭然としている。他方、ノーベル賞など見向きもしない丸山健二の文体に多少でも似た文体に、私は管見にして接したことがない。

「文は人なり」ではあるが、写真が実物の人間とは異なるという以上に、文は人そのものではない。綴られている文字に作者の体温はないのである。それが不思議に作者の血や肉を感じさせ、生きた印象を与えるのは、文体に神秘的な力があるからである。私が、もつと文体を愉しみたいと思う所以である。

〈秋田市在住の作家〉

秋田県の読書活動推進施策

～日本一の読書県をめざして～

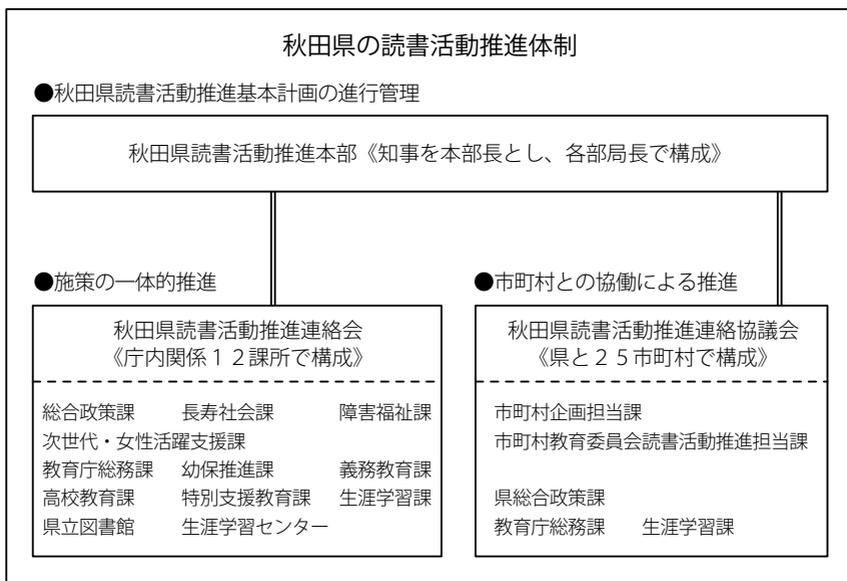
秋田県は、都道府県で唯一読書条例を制定し、「(「秋田県民の読書活動の推進に関する条例(平成22年4月施行)」)、毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

H28～32年度は「第2次秋田県読書活動推進基本計画」に基づき、「あなたの『読みたい!』をサポートします」、「『読書は楽しい!』の気持ちを広げます」という県民運動の視点で、県民の共感を高めながら読書活動を推進していきます。



©2015 秋田県んだっチャH290213

《読書活動推進体制》



《H29年度 県の読書活動推進の取組》

○ふるさと文学と読書のつどい2017in横手（10/28(土)）

横手市との共催により、横手市平鹿生涯学習センター（浅舞公民館）で開催しました。初めての地域開催ということで、地元横手市を中心に約350人が参加しました。

「第4回ふるさと秋田文学賞」の表彰式、県立横手高校放送部の生徒による一昨年度の受賞作品の朗読、座談会「若者を引き込む読書の魅力とは」の3部構成で、本の世界に浸りました。

第3部の座談会では、自らの読書体験などについて話題が広がり、壇蜜さんは「読書をするとうれしさが生まれ、自分を好きになれる」、佐竹知事は「図書館や学校の枠にとらわれず、もう少し軽く、楽しく考えることができる読書の間を県民の皆さんと作って行きたい」と語りました。



【第3部 座談会『若者を引き込む読書の魅力とは』】

左から、伊藤孝俊横手市教育長、佐竹敬久知事、壇蜜氏（タレント）、西木正明氏（作家）、細谷拓真氏（NPO法人Yokotter理事長）

○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、保育所等へ贈って再利用してもらう取組です。

平成23年度に「スギッチリサイクル文庫」として始まった本事業は、28年度までの6年間で762名の方々から寄贈があり、692か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

今年度からは「読んだッチ・リレー文庫」の新名称で、46か所の施設に届けられています。（12月末現在）



○読書活動推進パートナー支援事業

企業や民間団体を読書活動推進パートナーとして、住民が身近な所で読書に親しめる環境づくりに取り組む市町村を支援する事業として創設しました。今年度は、スーパーや病院など5市町村8か所に読書拠点が設置されました。

○プロスポーツ等連携読書推進事業

「ブラウブリッツ秋田とエンジョイ読書」（サッカー）

「秋田ノーザンハピネッツとハッピー読書」（バスケットボール）

プロスポーツチームと連携し、選手やスタッフのおすすめの本を紹介したリーフレットやポスターを学校や図書館に配布して読書への関心を高めたほか、チームのマスコットキャラクターを派遣したイベントを図書館で開催しました。



【ブラウゴンから本を貸出】
(秋田市立中央図書館明徳館)



【秋田ノーザンハピネッツとハッピー読書
ポスターとリーフレット】

～インターネットでも読書に関する情報を発信しています～

「ふるさと秋田文学賞」のこれまでの受賞作品や、家族で一緒に楽しめる本のリスト「家族で読書おすすめ50選vol.2」、県内の全市町村長に「秋田県ブックリーダー」として御紹介いただいた「私の一冊」など、読書に関する情報を掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

- ・あきたブックネット（公式Twitter）
- ・あきたブックネット（秋田県読書活動推進総合ウェブサイト）



作品募集要項・応募者内訳一覧



第4回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

●募集作品

- テーマ 秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・人物・文化・風土・物産などを題材とした小説・随筆・紀行文
- 部門 「小説の部」…A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「随筆・紀行文の部」…A4判の400字詰め原稿用紙20枚以内

●応募資格

年齢・性別・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●募集期間

平成29年4月1日(土)から平成29年7月31日(月)まで
 郵送の場合は、当日消印有効です。
 作品を直接お持ちになる場合は、平日の午前9時から午後5時までとします。
 電子メール・FAXでは受付しません。

ご注意
 送付部数は
4部(コピー可)
 です。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞 …1編(正賞/賞状 ふるさと秋田文学賞(佳作)…1編(正賞/賞状	副賞/県産品および賞金50万円) 副賞/賞金5万円)
「随筆・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞 …1編(正賞/賞状 ふるさと秋田文学賞(佳作)…1編(正賞/賞状	副賞/県産品および賞金30万円) 副賞/賞金3万円)

※後日、入賞作品を収録した作品集を贈呈します。

●選考委員

1次選考委員 柴山 芳隆 氏 (秋田市在住の作家)

最終選考委員 内館 牧子 氏 (秋田市出身 脚本家)
 塩野 米松 氏 (仙北市：旧角館町出身 作家)
 西木 正明 氏 (仙北市：旧西木村出身 作家) (五十音順)

●応募要領

- 原稿 ・原稿は縦書き。(ワープロ原稿はA4判横長とし、必ず400字詰め原稿用紙換算枚数を明記してください。)
- ・電子データでの応募は不可です。
- ・日本語で書かれた自作未発表の物で、各部門1人1編に限ります。
- ・同一部門への二重投稿は失格とします。
- 表紙 ・応募作品にはく表紙>として、①作品のジャンル、②題名、③原稿枚数、④氏名、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業(学生の場合は学校名)、⑪引用または参考とした文献・資料、⑫募集を知った方法(新聞・雑誌名・ホームページ等)を明記してください。
- ・<表紙様式>は「あきたブックネット」(HP)に掲載しています。
- ・題名と氏名には必ずふりがなを明記してください。
- ・ペンネーム使用の場合は、本名(ふりがな)を必ず明記してください。
- あらすじ ・200字程度にまとめたあらすじを表紙の次のページに添付してください。
- 応募部数 ・4部(原稿は、必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩を紐やクリップで綴じてお送りください。送付原稿はコピー原稿可。)
- 個人情報 ・応募原稿に記入された個人情報は、本文学賞の選考、結果等の連絡を目的に使用し、あらかじめご本人の同意なく第三者に開示することはありません。
- 著作権等 ・応募いただいた作品は一切返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。
- ・入賞作品の著作権はすべて主催者に帰属します。

●選考結果の発表

- ・最終選考結果は、平成29年10月中旬頃、入賞者に直接通知するとともに、ホームページでも発表します。(選考についての問合せにはお答えできません。)
- ・表彰式は、平成29年10月28日(土)「ふるさとの文学と読書のつどい2017」(横手市で開催)において行います。

●応募・問合せ先

秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班
 (平成29年4月から事務局が下記に移転しました。)
 〒010-8570
 秋田県秋田市山王四丁目1番1号
 電話 018-860-1216 <平日:午前9時~午後5時>
 ホームページ「あきたブックネット」に詳しく掲載しています。

第4回ふるさと秋田文学賞応募募者内訳一覧(H29)

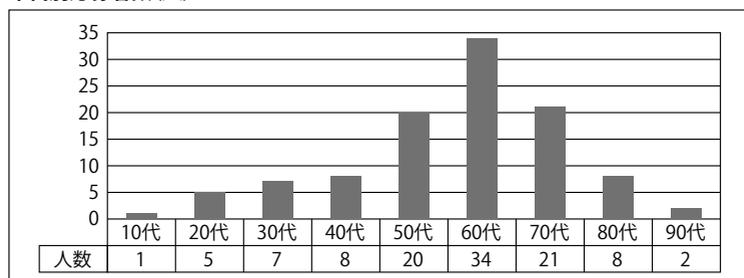
部門別応募募数(編)

小説	48
随筆・紀行文	58
計	106

男女別応募募者数(人)

男	69
女	37
計	106

年代別応募募者数(人)



都道府県別応募募数(編)

県	内	34
県	外	72
1	北海道	1
2	岩手県	2
3	宮城県	4
4	福島県	2
5	茨城県	3
6	栃木県	1
7	群馬県	3
8	埼玉県	5
9	千葉県	6
10	東京都	17
11	神奈川県	4
12	山梨県	1
13	新潟県	1
14	富山県	1
15	岐阜県	1
16	愛知県	1
17	滋賀県	1
18	大阪府	5
19	兵庫県	2
20	広島県	2
21	山口県	1
22	香川県	2
23	高知県	2
24	愛媛県	1
25	佐賀県	1
26	福岡県	2
計		106

募集を知ったきっかけ(件)

	きっかけ	件数
1	チラシ	9
2	公募ガイド	26
3	新聞	8
4	インターネット	34
5	広報紙	4
6	第1～3回応募	20
7	家族・知人	3
8	その他	1
9	不明	1
計		106

第4回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 平成三十年二月一日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課

秋田県



©2015 秋田県人だッチH290213